
彼に代わってピッチャー元カノ

鈴ヶ岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼に代わってピッチャーワンカノ

【NNコード】

N9470W

【作者名】

鈴ヶ岳

【あらすじ】

全てでは主人公である女子高生、姫野麗華の自殺からはじまる。

幽体となって自分の死体を見下ろす麗華に、天使と名乗る初老の男が話しかけてくる。

その内容とは。

「麗華の元カレ、藤村仁の魂が悪魔に持ち去られてしまつたから、彼の魂を取り戻すまで、彼の肉体に憑依して「藤村仁」になりますして欲しい」

とこうものだつた。

だが、仁は普通の高校生ではなく、将来を嘱望されたピッチャーだったのだ。

野球経験のない麗華は仕方なく承諾するが。

チームメイトたちの気持ちはバラバラで、その原因が仁のワンマンな性格によるものだと、麗華は思い知られる。

仁ひとつでは最後の。

麗華にとつてははじめての夏の大会が始まるのだった。

* このサイト以外でも2つのサイトで連載しております。

天使フイリップ

死んでやる

それは乙女のプライドだった。

今ここで死んでやる

空も。

麗華に共鳴している。

暗雲が立ちこめ、一瞬で真っ暗になり、雷鳴が轟く。

私は乙女のプライドを貫き通すのよ、だまあみる!!ルクめ

雷が。

近くに落ちたようだ。

えいっ！

つかの間彼女は白鳥になつた。

いやいや、そんなに綺麗じゃないから、アヒルかな。

空も校庭も、見慣れた町並みも、大きなブランコのよつこ、やら

りと上になり下になる。

死ぬ気まんまんの飛べないアヒルは、重力のまま落下する。

校舎裏の駐車場の、アスファルトが目の前に迫ると、視界はブランクアウトした。

暗闇の中で、「ゴキン、グシャン」と骨の碎ける音だけが響いた。いくつかの本で読んだ臨死体験のとおり、暗くて狭いトンネルをすこしスピードで昇つていく感覚。

死んでやる

「……てくれ……」

このまま死んでやる

「……たす……くれ……」

え？

助けて……くれ

なに？

「助けてくれ

誰よ？

目を開けてみると。

いつの間にか空は、綺麗な夕焼けに戻っていた。

麗華は屋上とアスファルトの中間くらいで浮いている。

足下に自分の死体がある。

夕陽に照らされ、黄金色に輝く絨毯のよじに広がった血の池に、
浮かぶように。

軀はまだケイレン中で、ダンサーがファニッシュのポーズをとる
みたいに手足を伸ばして、そこで動かなくなつた。

頭から顔にかけては、粘土のボールを床におとしたように潰れて
いる。

あたしは死んだ

乙女のプライドを貫き死んだ。

蝉時雨が、静寂を一層引き立てていた。

「たのむ、助けてくれ

「きやあっ！」

「感慨に浸つてゐるところを悪いんだが」

「誰よあんた」

それは初老のおじさんだつた。

ついさつきまで高校生だつた麗華には、年齢まではわからなかつたが、髪の毛の半分以上が白い。

ウイーン少年合唱団みたいな白装束を着て、古ぼけたショルダーバッグを肩から下げ、麗華と同じ高さで浮いていた。

そういえば、昔のテレビでドリフターズがコントでこんなかつこうしてたつけ

「天使だよ」

男はいった。

「あんたが？」

「フリップでいいよ

「じゃあ、あんたがあたしを天国に連れてってくれるんでしょう？」

？」

「いや、それが……」

フィリップは困った顔になり、

「ちと事情があつてな、少しばかり手を貸してもらいたいんだが」と言いにくそうに言った。

「じゃあ、さっきから『助けてくれ』って言つてたの、あんただつたの？」

「まあね」

「『まあね』って、あたしはたつた今死んだばかりなのよ、ふつうあなたがあたしを助けるんじゃない」

「だからそこをなんとか……」

麗華は「いやよ」という言葉を喉元で呑み込んだ。

このフィリップとかいう、インチキ臭いジイサンが本当に天使だとしたら、下手に機嫌を損ねたら、天国どころか地獄に落とされるかもしれない、と考えたのである。

麗華は一度大きな溜息をついてから、

「なによ事情つて」

とフィリップをにらんだ。

「ある人に憑依してもらいたいんだが

「憑依して、どうすんのよ？」

「その人に成りすまして、何日か過ごして欲しい

め、めんどくさい」

「あたしはね、生きるのが嫌になつたから自殺したのよ。それをまた生き返れだなんて……」

フィリップは「そこをなんとか」と言いながら、ショルダーバッグからなにやら分厚い百科事典のような本を取り出し、パラパラとめくつて「ああ、あつた」と一つのページに目を留めた。

「姫野麗華くんね。自殺の理由は……家庭内の揉め事と、学校で特定の女子から日々繰り返される、嫌がらせ。いわゆるイジメとい

「いやつか……うーん、男性問題もあるようだね

と、まるで市役所の市民課の職員のよう、「事務的に独り呴いた。

「自殺にしてはやや安易な動機だが、最近の若い口はすいぶん簡単

單に死ぬんだね、私も忙しくてかなわん」

最後は皮肉つぽく毒づいて嗤つた。

「あんたには関係ないでしょう？ その特定の女子ってやつから、あたしがどんな仕打ちをされ続けてきたか、あんたになにがわかるっていうのよ」

麗華がたまらず声を荒げると、

「確かに」

とフイリップは本から眼線を上げて、上目遣いに麗華を見た。

「確かに私には関係ない話だが、君たち若い人は自殺をするということがどういう意味なのか、わかつてないようだね」

フイリップの視線の鋭さに麗華は一瞬氣を呑まれた。

「な、なによ意味つて」

「靈界では自殺は大罪なのだよ」

「え……えええっ！」

「まさか君、死後に天国に行ける、なんて思つていたんじゃないかな？」

「かね」

「そこまで高望みはしないけど……じゃあ、地獄に行くの？」

フイリップは目を閉じて、ゆっくりと首を振つた。

「地獄以下、つまり論外、といつことだよ」

「う、うそ……」

「考へてもみたまえ、靈界から人間界に転生するところ」とは、修行のために送り出されたということなんだよ、自殺をすることは、その修行を自ら放棄したという意味になるわけなんだね、これが

「じゃあ、どうなるの、あたし？」

「靈界の刑法三十一條にのつとり、靈界の森へ追放されるのだよ」

フイリップは、哀れむような視線を麗華に向け、今度は裁判官のように重々しく低い声で言い放つた。

「えええっ……つて、それだけじゃ意味わかんないんだけど、それってどういことなのよ」

「つまり、広い靈界の中には、これまたとてもなく広い森があるんだが、その森の奥深く、深くふかーいところで、木になつて何万年、何十万年も動けずに、誰とも会話できずに過ごすという刑なんだね、これが」

話を聞きながら麗華の顔がひきつつていいく。

それは、気が遠くなるほど永きにわたる、孤独と拘束という絶望を意味していた。

「あの……じゃあ、その、あんたを手伝えば、そつならなーこうにしてくれるつていつの?」

「約束するよ」

「その、憑依する相手の人つて誰よ?」

「藤村仁」

「えええっ?」

その名前は麗華を愕然とさせた。

「君もよく知っている人、だね」

「ちよ、ちよっと……ジンが……なんで、また?」

藤村仁。

名前はヒトシと読むが、麗華は「ジン」と呼んでいた。

彼は麗華の中学時代の同級生であると同時に、県内でも有名な高校野球のピッチャーダラだった。

本人もそれを鼻にかけて、ちょっと天狗になつていいところもあつたが。

将来を囁き望され、このあたりではちょっとした有名人だった。

そして、直接ではないが麗華の自殺の原因の一つでもあったのだ。

「彼はね」

フィリップはこれまで一番厳しい顔つきで、遠くをながめて言った。

厳しい顔になると、目が猛禽類のように鋭くなり、最初の印象よ

りずっと怖い顔になつた。

「彼は、やつてはいけなことをやつてしまつたんだよ」

「やつてはいけないこと?」

「悪魔を召喚して、魂を売つてしまつた

ジン

藤村仁の家は麗華の学校から、数キロほど南にあった。

一階建ての、同じようななかつこうをした建売住宅が幾つか並んでいる、一番東の端で、二階の東側が仁の部屋だとフイリップは案内してくれた。

初めて入る仁の部屋だ。

付き合っていたはずなのに、初めてだ。

麗華に今心臓があるなら、さぞドキドキしていたことだろう。

同じ年の男の子の部屋 자체初めてだった。

だが、そんな気分もほんの一瞬だった。

フィリップの後に従つて、屋根から直接仁の部屋に入る。

実体のない麗華とフィリップは、屋根も天井の板もまったく関係なく素通りできた。

六畳ほどのフローリングの部屋の中央に、仁がうつ伏せに倒れている姿は、麗華を一瞬フリーーズさせた。

「ジン、ねえ、ジンつてば……」

「むだだよ、もう死んでる」

「そんな……こんなに綺麗なのに、なんだか眠ってるみたいなのに」

「そういう君だつて、もう死んでるんだがね」

「そう……そう、だつた」

フイリップにべもなくそう言われて、麗華も初めて自分の死を自覚すると、なんだか涙があふれてきた。

倒れている仁の下には、大きな紙に描かれた魔方陣のようなものが敷かれている。

仁はそれを覆い隠すように倒れたらしかつた。

「いつたい、いつ死んだの？」

麗華はしゃくり上げながら聞いた。

「ついついさつき、君が飛び降りたのと同時にくらいかな、空が一度真っ暗になつただろ？」

「よく憶えてないけど……」

「あの時に、悪魔が蘇つたわけだ、正確には死んだのではなくて、魂を抜き取られたわけだが……」

「どうしてそんなことになつたのよ？」

麗華が聞くとフイリップは麗華に掌を向け、「急いで、少しでも早い方がいい」とさえきつた。

体育会系特有のド派手な半パンのジャージとTシャツから出ている腕や首は、本来なら野球部にありがちな部分焼けで真っ黒のはずなのに、すでに蒼白になつていて、死後硬直が始まっていることを示していた。

フイリップは無造作に仁の下の魔方陣を引っ張り出すと、手品師のようにそれを一振りして燃やしてしまった。

「仁なんのがあると、間違つてまた変なのを呑んでしまいかねないからね」

麗華を仁の隣に座らせ、なにやら口の中でも「も」とアラビア語だかヘブライ語だかの呪文をひとしきり呟き、最後に気合とともに「カーマハ・キマグレッ！」と叫んだといひで、麗華は氣を失ってしまうのだった。

再び目を覚ました時には、麗華は仁の体に入つていて、相変わらず床の上にうつ伏せに倒れている状態だった。

あれ？ なにが起つたの？

「あ…………」

「なに？ 動けない

「動かない方がいいよ、少し体が冷えていたようだから、血が流れ温まるまで時間がかかりそうだ」

「え…………？」

「説明するからそのままの状態で聞きなさい」

「あ……い……」

「今の時代の人間たちは、スポーツという体を動かす娛樂を楽しんでいるようだが、これは紀元前九世紀あたりのオリンピュアの大祭に起源をみるとできようかな、ともかく君のボーイフレンドはその中の野球というボールを使った種田をやつていたようだね」

「え？」

そ、そのレベルから説明するの？

「ん？ ああ失礼、もっと噛み砕いて説明しようか」

フイリップはそう言つて笑つたようだつたが、うつ伏せの麗華に彼の顔は見えなかつた。

ここで余談だが、仁に憑依した麗華をビシリの名前で呼ぶか、作者も正直さんざん悩んだのだが、以降は一応「麗華」で統一することにしよう。

「その野球というスポーツの高校生の大会が明後日、つまり七月十日から始まるらしいのだが、仁君は大会の直前にきてプレッシャーのあまり、悪魔に魂を売る契約を結んでしまつたのだよ」

「えええつ？」

「すなわち『魂を売るから試合を全て勝たせてくれ』とでも契約したんじゃないかな」

「いくら緊張してたからって、そんなマニアックな」としなくても……

「いやいや、彼はもともとカルト趣味があつたようだ……」

「うそでしょ？ ジンにそんな趣味があるなんて！」

麗華は血相を変えて飛び起き、部屋の中を物色した。

「いらっしゃ、いかんな他人の部屋をそんなにひつかき回しては」

「いいのーあたしにはその権利くらいあるでしょ？ これでも一応元力ノなんだし、何日かジンに代わってあげるんだし、ビッチ道ここで何日か暮らすんだし……」

そうはいつても。ごめんねジン

一度は彼氏と呼んだ間柄である。

さわやかな笑顔と、抜群のルックスで、誰にでも優しかった仁のタンスや机の引き出しを、疑いの目でいじくり回すのは、麗華にとつても良心の呵責に堪えなかつたのであつた。

だが結果。

呪いの藁人形セット。

呪いの白魔術セット。

呪いのジップシー魔術セット。

「な、なんでこんなに『呪う』のが好きなのよ」

さすがに麗華が悲鳴をあげると、

「ずいぶんとディープな趣味を持っていたようだね」

と、フィリップがまるで殺人事件の現場検証をしているベテランの刑事のように、無感動にこたえた。

おまけに。

ロリータ・SM趣味のエロ本多数、ロリータ・SM趣味のDVD多数、ロリータ・SM趣味のブルーレイ多数。

なにもブルーレイで見なくたって

「パソコンと携帯もみてみるかね？」

「も……もう、いい……」

パソコンと携帯ともなると、もつと「黒い」趣味が見つかりそうだった。

き、きめえ。こいつきめえ

麗華は下半身の力が抜け、とうとう座り込んでしまうのだった。

「ま、まあ、『呪いのセット』はともかく、それ以外のオモチャ

だったら、今時の男はだいたいこんなもんだがね」

「そんなはずないわ、あんなさわやかだったジンが、まさか……」

麗華の心の中で、「ドローン」という音が響いた。

「人というのはわからないものだね」

フィリップがまるで他人事のように、DVDのケースをつまみ上げ、亀甲縛りに縛られた少女の写真をあれこれ見ながら、「ところで」と続けた。

「話は本題に戻るが……大抵、人間の行う召喚などというのは大部分がお遊びで、なにも出てこないのが普通であるし、相当の修行を積んだ専門家がやつたとしても、使い魔ついど的小者を呼び出るのが精一杯なんだが。仁君の場合、どんな方法で呼び出したかは知らんが、とんでもない大物の悪魔を呼び出してしまったようだ」

「どうしてそんなことわかるの？」

「小者の悪魔といふやつは知能もそれなりで、召喚された後も、人間のいうなりになつたり逆に工サにつられて騙されたりするものなんだ。だが強力なやつほど知能は高く、プライドも高いから、人間のいうことなどバカにして聞かないものだ。だから『魂を売る』などの契約など無視して、いきなり仁君の魂をさらつて行つたんだよ」

「それで、さらつてどうするの？」

「食べるわけだね、これが」

フイリップは真顔で麗華をじっと見て言つた。

「そ、そんな」

麗華はさすがに体が震えた。

フイリップはさらに追い討ちをかけるように言つた。

「食べる……つまり魂がなくなる、というわけだから、もう人間に転生することもできないということだ」

「あたしはどうしたらいいの？」

「君はそのまま仁君として、普通に生活していくんれればいい。

仁君の魂は私が取り返してくれるよ」

フイリップの話を聞いて麗華は「そんな」と、頼りなげにつぶやいた。

「『普通に生活する』つていわれても、ジンつて本氣で甲子園とかプロ野球を目指してピッチャーなのよ。しかも、もうすぐ夏の大會が始まるのよ、あたしはどうすればいいの、とてもジンみたいに投げられるはずないし、ちつとも『普通の生活』じゃないわ

フイリップは麗華の肩に手を乗せて、じっと目を覗き込みながら

言った。

「かわいそうだが君の方は自分でなんとかしてもららうしかない、私の方だって、上級の悪魔と交渉するのは大仕事なんだよ……それに本来、これは君たちにとって大サービスなんだがね」

「大サービスって？」

「本当ならば、我々天使は自殺者や悪魔に魂を売った者に対しては干渉しないのが普通なんだよ、いちいち手を貸していくべきがないからね。だが、今回のように大物の悪魔が人間の魂を喰つて完全に目覚めてしまうのは靈界にとっても看過できない大事件なんだよ。だから君の大罪も帳消しにして、仁君の魂も救つてあげようというのだ」

「でも、それで相手の悪魔つて、そんな簡単にジンの魂を返してくれるの？」

「いや、おそらく無理だろうね。対決する準備もしておかないと」

「対決つて、戦うの？ 大丈夫なのそんな歳で？」

「フィリップは本気で気分を害したらしく「失敬な」と鋭く言い、「天使というのは神に仕える戦士でもあるんだよ、まだまだ私だつて悪魔の一匹や一匹……」

とムキになつた。

麗華は形だけうなずきながら、別のことを考えていた。

私はいつたい何田ジンと代わつてればいいのよ

その時。

階下から仁を呼ぶ、母親の声が聞こえてくるのだった。

「仁」「ほんよ、早く降りていらっしゃい」

麗華は驚きのあまり心臓が再び止まりそうになつたが、かろうじて「はーい」と返事をして、

「ジンの」「両親は今回のことなにも知らないのかしら」と小声でフィリップに聞いた。

「お父さんは仕事だし、お母さんは夕飯の買い物に出かけてたほんのわずかの間のでき」とだつたからね

「でも、今日、練習はどうしたの？」

「仁君はよく練習をサボつてたらしい」

「え？ それ本当」

麗華にとつてはそれも初耳だったが、そんなことを気にしているヒマはなかつた。

「あたしだつてバレないかしら？」

と、麗華は自分の体をながめ回しながら聞いた。

「バレるわけないじゃん」

フィリップは少しいライラした感じで、取り合わなかつた。

麗華はちょっとムツとして階段を降りて行つた。

母親は不思議そうな顔で、麗華の顔をしげしげと見てから、階段の上を見上げ、

「誰か来てるの？」

と、聞いてきた。

「だ、誰も来てないわ……ないよ……」

「なにか話し声が聞こえたようだけど」

「え、英会話の勉強してたのよ」

母親は「えええ」と田を丸くした。

「あんたが勉強だなんて、ちょっと熱もあるんじゃない？」

そう言つて、麗華の額を触つてきた。

「だ、大丈夫よ……だよ」

「それに、あんたが私の呼ぶ声に返事をするなんて、小学生の時以来じゃない、ホントに大丈夫なの? どつか悪いんじゃないの」

「えつ? そうだったの?」

しまつた、早くもピンチ

「だ、だからさ、最後の大会ももうすぐでしょ? なんだか、今までの緊張がほぐれて、すっきりしちゃってさ」

すると母親は、「そ、そうなの」と言葉を選ぶように、

「そ、そうね、あんた今まで頑張ってきたもんね、やるべき」とは全てやつたんだから、そりよ、全てやつたのよ

と、なぜかぎこちなく『やつた』といつ言葉を強調した。

だって、この時間にジンが家にいるつてことは、練習に出てないのバレバレじゃん、返事のことなんかより、なんでそっちの方を聞いてこないんだろう?

麗華は首を捻つたが、キッチンに入った瞬間、それどころではなくなつた。

うわっ! 肉の焼ける臭い

それは、麗華にも心当たりがあった。

仁とまだ付き合い始めたばかりのころだ。

初めて彼氏ができたことが嬉しくて仕方ないのに、なにを話したらいいのかわからない。

仁のことを大事に思えば思ひませど、彼をどう扱つたらいいのかわからない。

「こんなことを言つたら怒りせてしまつんじゃないか」などと余計な心配をしてしまい。

結局、どうでもいいようなことに食いついて、笑つてこりじやないのにわざとらしく

はしゃいでみせたりするあの感じだ。

「あらあら、お話が弾んでるのね、はい、今日は奮発してステーキよ」

弾んでるか？この“せくしゃくした会話が

母親の、取つてつけたような言い方と、不自然にトーンの高すぎ
る明るい声に、麗華は思わず失笑しそうになつた。
だが。

この家つて、いつたいいつもほどんな雰囲気で夕飯食べてるのかしら？

何日も散歩をさせていなかつた犬を久しぶりに連れ出したり、こ

んな感じで些細なことに大はしゃぎするのではないか。

そんな風に考えると、この不器用で優しい夫婦がひびく憐れに思え、なんだか涙が出そうになつてくるのだった。

でも、無理、ステーキは、無理

麗華はとりわけ牛肉が大嫌いだったのだ。

特にレアの、半生の、あの乳臭い臭いが苦手だった。

「明後日から大会だから、母さん、今日と明日は奮発するつて。
今日がステーキで、明日がカツレツ……『テキにカツ』、なんぢやつてな、あはははは」

父親が、顔をくしゃくしゃにして笑つた。

なんか、いい人たちじゃん……あたしん家なんか……

大手銀行員の父親と、経営コンサルタントの母親。

父親は大阪の支店に単身赴任中だし。

母親は主に地方の旅館の、経営アドバイザーとしてあちこち飛び回っているため、今は二人ともほとんど家にいない。

プライドが高く、エリート意識むきだしの二人。

夫婦というより、お互いライバルみたいな二人。

おかげでお金に困ることはなかつたが、麗華は高校に入つてから、ほとんど一人暮らしだった。

キッチンはこの家よりずっと広かつたが、食事はその無駄に広いキッチンで、四人掛けのテーブルで一人、コンビニの弁当を無言でつつく毎日だつた。

父親は大阪に愛人がいるらしいのだが、母親は全く気にしているようだ。

たまに家族三人がそろつた時には、高給レストランで食事をするのだが、両親の携帯に代わりばんこに電話がかかってきて、退席する時に「失礼」と言う以外は、ほとんど誰も喋らない。

今日の麗華の自殺でも、すぐに帰つて来るかどうかさえわからないう一人である。

形はともかく、こんな賑やかな食事は、何年ぶりだらう。だが。

ステーキだけは、ちょっと……

幸いなことに、汁物は洋風のスープではなくワカメの味噌汁で、ワカメは「はんのおかずになつた。

キュウリとナスの浅漬けもちょうど旬で美味しかつたので、そつちばかり食べていると、

「どうしたの？大好きなお肉食べないで」

と、案の定というか、母親が心配そうに聞いてきた。

「いや、あの、別に、ちょっとダイエットしようと思つて……」

「そんなんで大丈夫か？試合はあさつてなんだから、力つけなきや。

あさつてに向けて肉を漁つて、なんてな」

父親は完全に上機嫌で、ビールで真つ赤な顔になつてゐる。

「うん、は、はい……」

『テキにカツ』もお父さんのアイディアだつたのね、どうでもいいけど

麗華は赤身の所を選び、ナイフで一切れ、できるだけ小さく切つて、息を止めて（ついでに鼻もつまみたかつたが）極力嚥まずにそれを呑み下した。

「ふう……うつづ」

やつた、食べれた

母親は本当に奮發したようで、肉が高級品だつたのが幸いし、ほとんど嚥まずに飲み込めたのだった。

ふと我に返つて回りを見ると、父と母の視線とぶつかつた。一人ともなぜかひどく不安げな顔をしていたが、目が合ひ、嬉しそうに微笑むのだった。

「美味しいだろ？」

と父親は言った。

「う、うん」

この勢いを駆つてもう一切れ。

こんなに喜ばれるなら、食べないわけにもいかない。

こんどは少し大きめに　　と言つても普通サイズくらいに　　切つ

てみた。

大嫌いではあるが、決して肉アレルギーといつわけではないのだ。だが。

「ぐへえ、うげえ……」

ちょっと調子に乗りすぎた。

嚥まずに呑み込むには肉が大きすぎて、むせたのである。

血相を変えて、シンクに駆け寄り咳き込む。

おかげで返つて、口、喉、鼻の粘膜が全て肉の臭いで満たされ、しかもヒリヒリする。

「大丈夫？」

母親が悲鳴のような声をあげて背中をさすってくれる。

「だ、大丈夫……」

「あんたやつぱり、病院で診てもらつた方がいいわ、あんなに大好きなお肉でもどすなんて」

「ほんとに大丈夫……」

「ちょっとしつこい、でも……」

この感覚。

嫌じやない。

これは、遠く離れた所に住んでいる祖父や祖母の家に久しぶりに行つた時の感覚に似ていた。

このぎこちなさ。

このいささか見当違いな深情け。

そしてこの、あふれるばかりの愛情。

それにしても。

ジンのドアホウ、普段いつたいどんだけ親に気を遣わせてんだよ

胡桃美琉久ファーストバトル

おなかすいた

お昼休みのチャイムが鳴り、麗華は弁当箱を開けて溜息をついた。
おかげの所には巨大なハンバーグが鎮座している。

麗華にとってそれはまさに、愛情と言つ名の魔物が凝結したような
肉塊であった。

ま、またお肉……

朝食は卵焼きだったので、昨夜の分までお腹いっぱい食べることができた。

それにしても、男の子の体って、どうしていい、お腹がすぐの
よ

休み時間は、念のためにコンビニで買ってきたサンドイッチやおにぎりでしのぐことができた。

だが、そもそもそれらは母親が朝、ハンバーグを焼いているのを見て、お昼に弁当代わりに食べるつもりで買ったのだが、仁の体の食欲は、麗華の想像をはるかに超えていた。

休み時間の度に押し寄せる底なしの空腹にそれは一つ減り一つなくなり、ついに全て食べつくしてしまったにも関わらず。

お昼休みの仁の体のエネルギーは、ほとんどゼロに近かつた。

どうしよう

麗華が途方に暮れていたその時。

教室の戸が開いて、胡桃美琉久が入ってくるのだった。

「じんにちは、ジン」

「ミルク……」のアマ、なんでここにくるのよ

胡桃美琉久。

麗華の恋のライバルにして、自殺に追い込んだ最大の張本人。

中学時代から同学年の意地悪グループと徒党を組み、陰ながら麗華に嫌がらせをし続けた、少女の皮を被ったケダモノ。

いつも裏から手を回すよつた卑劣なやり方をするため、証拠はなかつたが、麗華のカバンにベビを入れたり、日記帳を盗んで学校の掲示板に貼り付けたりなど、その卑劣で手の込んだやり口は、じつ以外に考えられなかつた。

それでも、中学時代まではまだ悪戯ていどだつたが。

最近では、出会い系サイトに麗華のパンチラ[写真]と携帯番号を載せるなど、その嫌がらせはシャレにならなくものになつていていたのだ。

「はい、今日のお弁当」

「今日の、つて……」

ジンの「アホウ、毎口」のメスブタにお弁当もひつてたつてえの？しかも、こいつまでジンって呼んでるし……

「あんた、学校抜け出してきたの？」

麗華は怒りを押し殺しながら聞いた。

「いやだんもお、いつものことじやない」

美琉久は女子と喋る時よりもずーっと高いトーンの声で話しながら、麗華の背中をさわさわと触つてきた。

麗華は鳥肌が立つ思いだつた。

麗華と美琉久は、仁とは別の学校に通つていたのだ。

仁の学校から一キロほど東にある、聖ポール・モーリア学園といつお嬢様学校である。

美琉久は突如、なにかの発作のようにしゃくづ上げ、ハンカチで田を押さえながら、

「それがねえ、ジンも聞いたでしょお、昨日麗華ちゃんが屋上から飛び降りちゃつて、学校中大騒ぎなのよ……あそこにいると麗華ちゃんとの楽しい思い出をじつぱじつぱい、思い出しちゃつし、なんかいられなくなつて……」「……」
と泣いたが、涙は出ていなかつた。

「まあ大騒ぎにはなつてるでしょうね。つつか、なにが麗華ちゃんよ……」

確かにこのひの学校でも朝から緊急朝礼とホームルームが開かれ、

ちょっとした騒ぎになつてた。

麗華にとつては不思議な気分だったが、本人としてはなんだかもう遠い昔の話のようで、すでになんとなく、他人事のようにも思えていたのだった。

「ジンも、早く元氣出して……そりよ、いつまでもクヨクヨしてたつてはじまらないわ、せめて生きている私たちだけでも仲良くやつていきましょ」

美琉久は唐突に窓の外の雲を見上げ、力強くまくしたてた。

「この、偽善者め

だが。

「ほうら、今日は特製フォアグラ弁当よ、美味しいわよ」

「フォアア…グラ? ……ゴクリ

フォアグラだけではなかつた。

弁当の中身はまるで食の宝石箱のように、あらゆる贅が敷き詰められてる。

背に腹は代えられない、か……でも、なんという屈辱、つつつか、美味しい、でも、くやしい

「相変わらずいい気なもんだな、おい」

麗華が『特製フォアグラ弁当』をほおばりながら、見上げると。

一人の男子生徒が麗華の机の横に立つて、怖い顔でこちらを見下ろしていた。

上背はそれほどないが、制服のワイシャツの上からでも、筋肉隆々なのがわかる。

「鎮西八郎……

仁と同じ、沢谷香高校野球部員の一人で、仁と同じクラス。

夕べ食事が終わって部屋に戻つてみると、フィリップはすでにいなくなつていて、机の上に野球部のスターティングメンバー全員の顔写真と、大まかな性格が書かれた名簿が置いてあつたのだ。

『鎮西八郎、通称ハチロー。チームの中でも最も野球を愛している、ハードトレーニング信者で、やる気のない人間が大嫌い。ゆえにチ

ームメイトの中では、『のことを最も嫌っている』と、書いてあつた。

「てめえ、きのうも休みやがつて……」こんな土壇場にきていつたいどつこいつもりなんだよ

角ばつた頬が横に張り出し、太い眉毛と共に、いかにも強情そつな顔を作っている。

「『』、ごめんなさい、ちょっと熱があつたから」「こわ……つづうか、なんであたしが怒られなきゃなんないのよ

「俺は三十九度の熱が出た日も練習はやつたぞ」

そんなのあんたの勝手じゃん

元々鬼のような顔が、恐ろしく強い眼光で麗華を見下ろし、それは普通の女の子ではとても我慢できない恐さだった。

つまり普通の女の子である麗華は、「だ、だから『めんつて……』とつぶやきながら涙が出てきてしまうのだった。

「て、てめえ、なんで泣いてやがんだ、男のくせに」「だ、だつて……」

これは八郎にとって、かなり想定外だったようで、でかい毛虫のような尻が八郎の名前のハの字のように下がるのだった。

「ちょっと、いい加減にしなさいよ」

そこへ美琉久がものすごい剣幕で、八郎に咬みついた。

こんな時の美琉久の性格の悪さは、頼もしかった。

「あんたみたいなその他大勢の雑魚とわたしのジンとは、もともと持つてる才能が違うのよ、雑魚は一人で壁でも相手にボール投げてりやいいの」

わ、わたしのジン？

「『』、このアマ」

八郎は美琉久をにらんだが、美琉久はまつたくひるまない。

「そんな狛犬みたいな顔で、つきつきりでグズグズ言われたんじや、せつかくのフオアグラが不味くなるわ、もう、気がすんだでしょ？」

あつち行け、シッシッ」

八郎は大きく舌打ちしたが、田頃からよほど美琉久にやり込められているらしく、それ以上逆らおうとはせず麗華をにらんで、「とにかく、これで明日の本番で無様なことやりやがつたら承知しねえからな」

と捨て台詞を吐いて、去つて行くのだった。

「ああいやだ、練習なんて凡人が集まつてやつてりやいいのよ」
美琉久は容赦せず、その背中にぶつけるように叫ぶのだった。
その八郎の背中とすれ違いざまに八郎の肩を叩いて、彼より頭一つ
分も背の高い、真つ黒な顔の男子がにこにこ笑いながら近づいてきた。

高橋エンリケ・マコト

『ブラジル系のクオーターで、バカ力がある。性格はラテン系で陽気すぎるくらい明るく、わが道を行くから』のことも全然気にしないらしい、短所は女好きなどいろ』

フィリップの名簿にはそう書いてあった。

つまり、良くも悪くも、頭の中からっぽ、といつことか。

「ウイース、またきてるね別嬪さん」

エンリケはくるなり美琉久の肩を抱いてにこにこ笑つた。

わざわざ近づいてきた目的は、これなんだろうと麗華は思った。

「ここにちはマコちゃん」

美琉久は満面の笑顔とは裏腹に、その腕を振りほどく。

「心配してたんだよミルクちゃん、きのう君の学校で変な事件があつただろ?」

変な事件つて……人ごとだと思つて

たしかに、この学校の連中からしてみれば、人ごとと言えば人ごとである。

「だから今日はミルクちゃん、こないんじやないかと思つて

そつちの心配かよ

「確かに悲しい事件だつたけど、でも……」

美琉久は、一瞬で泣きそつた顔をしたかと思うと、

「ジンの試合はもう明日なんだし、なんだかじつとしていられなくて」

と次の瞬間にきりりと表情を引き締めた。

まるで美琉久の方が悲劇のヒロインのようである。

その三文芝居を見ていて、麗華はひどくやるせない怒りがこみ上げてきた。

自分の死に対するこれ以上の侮辱はなかつた。

まだ面白可笑しく茶化してくれた方がマシである。

「じゃあ、試合が終わったらもうきてくれないのかい？」

エンリケの指先が、美琉久の前髪を優しくかき上げる。

「まさか、くるに決まってるでしょう」

美琉久の憂いを帶びた眼差しが、長身のエンリケを見上げた。

美男美女同士、確かに絵になるのだが。

「いづら、なにやってんのよ、人の食事中に、つつうかミルクはジンに用事があつたんじゃねえのかよ

県立沢谷香高校野球部 その1（前書き）

すいません。

前話で間違いがありました。

「あさつての試合」という意味の言葉が一回出ます。

試合は「明日」です。

他、気がついた誤字も訂正しました。

はあ

一、三歩歩く毎にため息が出た。

麗華はそれでも、龜のまゝに廻し足を詰塞に向けで歩ぐのだった。

「説しやなしね」

ハ郎は『最も仁を嫌つてしる』と、フイリッフの名簿には書いてあつた。

つまり、あの怒りようはやはり極端な例外と考えていいのだろうが、だが、あれがチームメイトたちの正直な気持ちの代弁なのだろう。もしも野球部の三年生全員が、あんな風に自分を責め立ててきいたらどうしようか。

逃げよう、その場で

麗華はあくさりと、そう割り切った。

もどもと仁とはたたずみ・元カレ・元カノ」というだけの間柄なのである。

しかも「つき合っている」などというのは形の上だけで、野球で忙しかつた仁とはなに一つ彼氏・彼女らしいことなどしてきてはいいないのである。

中一の時の修学旅行の際、制限されたらしいだけで、ほとんど元一トらしいこともしなかつた。

わざわざ麗華が仁の野球の練習が終わるまで待っていて、
で一緒に帰る、といういどんの「彼女」だったのだ。
ただ家ま

「そもそも、野球で忙しい」などと云うのも、あの美玲久の調子づきようを見ていると怪しいものだ。

考
え
て
い
る
う
ち
に、
だ
ん
だ
ん
腹
が
立
つ
て
き
た。

下手に形式だけ「告白」などされたものだから、返つて他の女子たちの嫉妬を買い、イジメの標的にされた分、とんでもない貧乏くじ

を引いただけではないか。

高校に入つたらもつとつき合ひは遠のいた。

チームメイトのキャッチャーのヤツが、麗華が仁に近づくことを公然と邪魔をし始めたのである。

「三年の夏の大会が終わるまで、野球部員は女人禁制だ」というのがヤツの言い分だった。

一応もつともと言えばもつともな理屈だが、ただでさえモテモテで近づく女の子たちがウジ、ボウフリの「」とく後から後から湧いて出てくる「彼氏」と口をきくことすら禁じられたら、それは最早「彼女」とは言えなかつた。

こうして麗華は、彼女としての実権を剥奪された挙句、そのくせ名目だけの思われ人として、仁のファンどもから嫉妬のためにだけはされるという、人身御供になりさがつたのだった。

悩みぬいた挙句、思い切つて別れ話を持ちかけた時。

仁は「えつ？」と田を丸くした。

「俺、他に彼女つくる気ないし、気が変わつたらまた付き合つてくれないかな」

そう言つてくれた。

ちょっと救われた感じがした。

だが。

今思えば、妙にあつさりしそぎてもいた。

実のところ、あの時の仁がどんな顔でそう言つたのかは思い出せない。

というより、涙で霞んで見えなかつたのである。

でも、それでも

この男（仁）がここまで腐つていたとは。

麗華は歩きながら、悔しさのあまり奥歯をギリギリと鳴らした。

女の子にはあんなに優しかつた仁に、こんなとんでもない裏の顔があつたとは。

あの、異様な「呪いのセツト」とい、高校生とは思えない歪んだ

フェティシズムのはけ口といい。
男社会での嫌われっぷりといい。

人間のクズじゃない

こんな男のために自分は死んだのか。
そう思ふと、情けなくなつてくるのだった。

麗華の自殺の原因は一つではなかつた。

一つには、子供に無関心な自分の両親への無言の抗議。
もう一つは、美琉久一味の執拗な嫌がらせに対する、間接的な復習。
そして、麗華が仁に近づくことを禁じた、仁のキャッチャー大江戸
大鉄への当てつけ。

だが、最大の動機は。

自分が死んで身を引くことで、輝かしい未来が待つてゐるであろう
仁を自由にしてあげよう、という、美しい大儀めだつたのだ。
ほんとうの愛というのは、貰うものでも奪うものでもない。『
与える』もののよ

それは『愛のために死を選ぶ』という究極の美学だった。

それは麗華の、美琉久や大鉄や、そして仁本人に対する最後の矜持
だつた。

そしてそれは、愛に殉じる女神のような、広く深い母性だつた
といふか、麗華も確かに自分で自分に酔い痴れる悪い癖があるのだ
らうが。

ともあれ、今となつては、それらは全て無意味だつた。
完全に犬死だ。

結果、あの美琉久を余計に調子に乗せ、仁という天才投手の仮面を
被つた変態を、今まで以上に放埒に野に放つただけではないか。
その上自分がなぜ、この期に及んでこのバカ男に成り代わつて汚れ
役をやらなければならぬのか。

やっぱり逃げよう、まだ靈界で木になつた方がましよ
「自殺にしては、やや安易な動機だが……」
フィリップの皮肉を込めた嘲笑が、頭をよぎる。

確かに他人から見れば安易だったのかも知れない。

だが、今でも死んだこと自体は後悔していない。

ここまで変人や「ゴミクズみたいな人間に囮まれたら、誰だって一度や一度は本気で死ぬことを考えるだろう。

はあ……

麗華はまた、ため息をついた。

最大の問題は、自分が「靈界の法に触れる」などと、思いも寄らない地雷を踏んでしまったことだ。

やつさとジンの魂を連れてきてよ

麗華は頭の中のフィリップをにらみつけて抗議した。

だいたいあたしは仁としてただ「生きて」いればいいんだし、野球なんてする必要ないじゃん、仁だってギリギリになつて悪魔にすがりつくくらいだつたら、普段からもっと練習しろつてのよ。そういうあたしには関係ないじやん

やつぱりヤバくなつたら逃げよう。

そう考えると、少しは気持ちが軽くなつた。

ふと、校舎脇の角の所で一度足を止め、建物の陰から部室を窺う。

先ほどから、ゆっくり歩いていたのには理由があった。

昨日まで女の子だつた麗華にとって、洞窟のように薄暗い部室で、他の部員と一緒に着替えるのが恥ずかしく、できるだけ時間をずらそうとわざと遅れてきたのだ。

一十メートルほど先にある部室からは、蜂の巣箱から飛び立つ働き蜂ように後から後から、思春期の男たちが吐き出されて行つた。

そろそろいいかな

恐る恐る入つて行くと、まだ中に一人いた。

「仁……こんちは……」

麗華が挨拶をすると、一人とも弾かれたように「気をつけ」の姿勢になり、「こつ、こんちわーっす」と声を裏返して最敬礼をした。

一人ともフイリップの名簿にも載つていなかつたし、様子からして、恐らく下級生なのだろう。

鬼気迫る勢いで、素早く着替えを済ませ、

「お先に失礼します」

と、大慌てで飛び出でて行つた。

なるほど、下級生からはずいぶんと恐れられてゐるみたいね

今さら驚くことではなかつた。

だが、次の瞬間、ドアが勢い良く開き、こんどは麗華が弾かれたようになつてしまつた。

「こゝんにちは

麗華が挨拶をすると、相手はいかにも怪訝そうに麗華の顔を覗き込んできた。

しまつた、こゝの人誰だつて、名前忘れちゃつた

「なんだよお前、女の子みたいな挨拶して」

彼はそう言つと声をあげて笑つたのだが、その空々しい空笑いはいかにも不自然で、目も笑つていなかつた。

その上彼は、湿氣を帯びたような目で息を弾ませ近寄つてきたのである。

「おいおい、男どうしでなに恥ずかしがつてんだよ」

と、麗華の肩に手を置き、顔を近づけてくる。

思い出した、遠藤盛遠つて子だ

遠藤盛遠。

『人知れずゲイであることを悩んでいるが、卒業を前にして、そろそろ本人はそのことをカミングアウトするきっかけを狙つてこる。本人は真剣なだけに、ある意味最も要注意』

「……」

『どうしてあたしつてこゝ、運が悪いんだろう

麗華は、思わず身をよじつて、肩に触れる生温かい手から逃れた。すると。

「な、なんだよお前、ナヨナヨして、ははは、変なヤツだな、ははは

と、逆に遠藤の方が妙に緊張している感じだった。

やばい、このシチュエーションは、やばい
だが。

しまった、ユニフォームの着かたがわからない
そもそも野球のユニフォームというのは、他の競技のジャージとは
全く違い、門外漢にとつてはひどく面倒なものなのだ。
仕方なく遠藤が着替えるのを、そつと盗み見ると。

「な、なに見てるんだよ、お前」

遠藤もそつと、口からを見ていた。

県立沢谷香高校野球部 その2

グラウンドではすでに、ほとんどの部員が各自練習前のストレッチやキャッチボールをして体をほぐしていた。

「いよつ、休日の翌日は社長出勤かい？」

八郎とキャッチボールをしている小柄な男が、口の端で笑いながら声をかけてくる。

皮肉屋の牛若小次郎という男だ。

小次郎の声につられて八郎が振り返るが、目の端で一にらみしだだけでも言わず、すぐに前を向いてしまった。

他の三年生は、こちらを見向きもしなかつた。

下級生は大声で挨拶して、最敬礼をしてくるが皆一様に麗華と目を合わそうとせず、こちらが声をかける前にできるだけ遠くに逃げようばかりに離れて行くのだった。

「熱が出たんだって？」

急に後ろから声をかけられ、驚いて振り向くと、そこにはあの、大江戸大鉄が立っていた。

「え……？」

大江戸大鉄。

沢谷香高校野球部のキャッチャーにして主将、そして仁と麗華を引き裂いた、直接の張本人だ。

「大丈夫なのか？」

切れ長に釣りあがった目が、心配そうに麗華を覗き込んでそう聞いてきた。

この目、大嫌い

「え？ ああ、うん」

お願いだから、あんただけは話しかけてこないで
麗華としてはこれ以上チームメイトから嫌われたくなかつたが、この大鉄だけは別だつた。

あまりにも大嫌いだつたので、フイリップの名簿のプロフィールも読む気になれなかつたくらいだ。

「ランニング、できるか？」

「ええつ？」

だから、熱があるつて言つてるでしょう

どうせ仮病で休んだことくらいはバレているのだろうが、どちらにせよこの男と行動を共にする気にはなれなかつた。

すると大鉄は麗華の耳に顔を寄せてきて、「きのう彼女、自殺したんだつてな」

と耳打ちをした。

麗華は少し驚いて「えつ？」と大鉄の顔を見た。

「それで練習休んだんだろ？きのうは」

大鉄は神妙な顔で、真っ直ぐ麗華の目を見て言つた。

「ふうん……この男でもこんな顔するんだ

麗華は、何度か大鉄と直接話したことがあつた。

高校一年の秋のころだつたと思うが、「もう仁には近づかないでくれ」と言つた時の大鉄の顔は無機的で、まるで石でできているのかと思うほど人間性が感じられなかつたものだ。

そんな野球口ボットのような男に、こんな悲しげな顔をする感情があることに麗華は少し驚いたが。

「あんたには関係ないでしょ」

と、突き放した。

大鉄は首の後ろを手で揉みながら、

「ちょっと走りながら話そつか」

と虚ろな目で誘つてきた。

嫌よ、あんたと話すことなんかないわ

そう喉もとまで出かかつたが、麗華は渋々後をついて走つた。

このチームメイトの雰囲気の中に、一人でいるのも嫌だつたのだ。しばらく一人で無言のまま、ゆっくりとグラウンドを回つた。

「俺もやりすぎたと思つてる、反省してるよ」

大鉄が空を見上げながら、独り言のよつに言つた。

反省するくらいなら、最初からするなよ、女人禁制なんて時代錯誤もいいとこだわ

「お前の生活の荒れ方が、あまりにもひどかったから……」

「そ、それは解る、大いに解る

「でも、かわいそうだったな、あの姫野つて子」

「かわいそう？」

「ほんとにそう思つてんの？」

「あの子だけは、他の子たちと違つてほんとに真剣だつたみたいだからな、だから余計に俺もきつい言い方をしちました」

大鉄の絞り出すよつな声には、確かにこの男なりの誠意がこもつていることは麗華にもわかつた。

だが中途半端な同情は逆に麗華の神経を尖らせたのだった。

「そう、確かにかわいそうだった」

麗華の心から無数に突き出ていた棘が、一斉にゅつくりと蠢きだした。

今までそれらは両親や美琉久にも向けられていたものだつたが、大鉄に向いている棘に吸收され、大きくなつて、巨大な一本の槍のようになつていく。

麗華はそれで大鉄を一突きしてやりたい衝動に駆られるのだった。

「あんたが殺したようなもんだよ」

無意識のうちにそんな言葉が口をついて出でているのだった。さすがに大鉄も堪えたのか、一度立ち止まつてしまつた。

だが麗華がそのまま走り続けたので、後を追つてくるのだった。

「恨むなら恨んでくれていいさ……いくらでも恨んでくれ

「恨むよ」

今さらなんだというのだ。

「でもな、誰かが鬼にならなくちゃ、野球部なんて集団はまとまらねえんだよ、すぐにバラバラになつちまうんだ」

言いながら大鉄の目は力を取り戻し、輝いてくる。

「だからなんだってのよ？」「

「俺は主将として無理やりでもそれをまとめなくちゃならなかつたんだ……そいやつてこの二年間、俺もみんなも死に物狂いでやつてきた、お前にとつては遊び半分だつたかもしけないけど、みんなお前がいれば甲子園に出られると、本気で思つていたんだよ、みんなお前のワニマンチームと言われたくなかったから……」

「そんなこと、俺には関係ないわ、みんな自分のことばっか考えて……」

パパもママもミルクもあんたも、みんなしてあたしをこの世から追い出しだんじやない……みんなみんなつて、野球部だつてみんなたしのこと嫌つてんじやない

麗華は言つていて涙があふれてくるのだった。

「だからお前も自分のこと考えろよ、もっと本氣で将来のこととか将来つてなに？」

「お前なら普口にだつてなれるんだぞ」

「バツカじやないの？ 所詮ボール遊びじやないの、それが人の死よりも重いっての？」

死んだあたしには将来なんてないのよ

「おい、お前らなにやつてんだ？」

突然後ろから怒鳴られて、一人は飛び上がつて振り向いた。

そこには麗華たちと同じユニフォームを着て、薄い茶色のサングラスをかけた体格のよい中年の男が立つていた。

「監督」

と大鉄が言つた。

二人ともいつの間にか立ち止まって言い合いをしていたのだった。

「藤村、もう体は大丈夫なのか？」

監督はあきらかに、視線に侮蔑を込めてそう聞いてきた。

「は、はい」

麗華は雰囲気にそう応えるしかなかつた。

「今日は軽い練習でいい、三十球でいいからフォームを確認しながら

ら投げる

と、大鉄にも田配せしながら言った。

結局こいつと組まされてんじゃん

バッテリーなのだから当たり前なのだが、麗華は渋々、ブルペンのマウンドに立ち、大鉄と向かい合つた。

……たしか、こんな風にして投げてたのよねジンは

ふりかぶつて

足を上げて……。

あれ? どうしたんだろう、投げられない

「お前、なにやってんだ?」

大鉄が疲れ果てたような足取りで、駆け寄ってきて麗華をにらんだ。

「ふざけるのもいい加減にしろよ」

「う」、「ごめん、まだ、体がだるくて」

なんであたしが謝つてんのよ

大鉄は大きくため息をついて、

「お前が腹を立てているのはよく解った、でもな、それと練習は別だろ?」

と、今度は哀願するような田で麗華を見てくる。

「え? だ、だから体の調子が……」

「そんなに練習したくねえなら今日はもういいから、たのむから明日は真剣に投げてくれよ、な?」

大鉄はそう言いつと麗華の返事を待たず、「おおい、遠藤」と盛遠を呼んだ。

「お前も軽く投げとけよ」

遠藤は普段ライトを守っているが、リリーフピッチャーでもあるのだつた。

遠藤は何故か麗華に微笑みかけウインクしてきた。

な、なに?

そして、ふりかぶつて、投げた。

「ああ！」

わかつた。

ワインクの意味ではない。

上げる足が反対だつたんだ

ピッティングフォームになつていなかつたのだ。

ワインクの意味も薄々解つたが、そつちは無視した。

ボーイ・ミーツ・ボーイ

きやあつ……

麗華が思わず悲鳴を上げそうになるその口を、フィリップは慌てて手でおさえた。

「どうしたのよ、その顔」

麗華は我に返り、部屋のドアを閉めてから声をひそめてそう聞いた。夕食が終わり 父親の予告どおりトンカツだった 二階に上がってきたところに彼が待っていたのだが、その顔。

たつた今、大型トラックにでも轢かれたのかと思うほど、グシャグシャだつた。

左の耳は削げ、その上の側頭部の頭皮も剥がれて、その頭皮は髪の毛が生えたまま、耳と一緒にぶら下がっている。

頭皮があつたはずの部分は骨が見えていて、しかも髪の毛は全体に火事場の中から這い出てきたかのように煤け、所々焼けて上に向かつて突き立つていた。

右の頬は裂けていてそこから、口の中の奥歯が覗いて見えており。なぜか皮膚の裂けた肉の所はどこも出血しておらず、代わりに高熱で炙られたようにただれて痛々しげに外気にさらされていた。

「いやいや、交渉決裂だよ、これが」

フィリップは傷のことなどまるで気にしていないかのように、他人事のようにそう言った。

「大丈夫なの、そんな大怪我して？」

「少したてば治るよ」

麗華は救急箱を取りに戻ろうとしたが、フィリップは「大丈夫」と手を振った。

「やつぱりだめだったの？ 相手の悪魔」

「まあ、大方の予想どおり、ということさ、人間の方から魂を差し出すなんて、近代ではめったにないことだからね、ヤツが簡単に手

放すなど考えられない、予想どおり激しい抵抗を受けてね

「そんなに強いヤツだったの？そいつ」

「人間である君に名前は教えられないが、恐ろしく強力な一級の悪魔だった」

全ては今のフイリップの顔が物語っていた。

「じゃあ、あたしはまだこれからもジンでいなきゃなんないわけ？」

「すまんが、あと何日か引き受けてもうつことになるね」

麗華はさすがにフイリップが氣の毒になる一方、仁の代役をした今日一日のことも思い出すと我慢できなくなり「もういいじやん」と吐き捨てた。

「こんなドアホウ、もう放つときやいいじやん、どうせ自分から魂を売ったのはこいつなんだし、勝手にそいつに食べられちゃえばいいのよ」

「いやいや、そういうわけにもいかんよ」

フイリップはゆっくりと首を横に振った。

「悪魔が完全に復活してしまうのも確かに困るが。実は彼……仁君は、微力ではあるがこの町の運命を握っていてね」

「それってどういうことよ」

「君には協力してもらっているから特別に教えるのだが。この夏、仁君の高校は野球の全国大会で、ちょっととした旋風を巻き起こすことをになっていたんだ」

「でも、それって、フイリップさんことひばぢゅうでもいい話なんじゃないの？」

「私はこの町が好きでね。四十年前まで、このあたりは本当にいい所だったんだよ。川の水は人が泳げるほど綺麗で、みんなその川で洗濯をしたりしてね。人々はみんな元気で、一生懸命畠で働いて、秋には祭のお囃子が鳴り渡っていたものだった」

「そんな所だったの？」

それは麗華の記憶には全くない風景だった。

麗華が生まれたころにはすでに、この町はほとんびアスファルトと

コンクリートで固められていたのだ。

しかもこの数年、その辺だけが近代的な田舎町は、中心部ですらシャッター街となっていたのである。

「今年の夏の野球大会をきっかけに、この町が少しでも元気になってくれれば、と思ったんだがね」

「それじゃあ余計にあたしなんかじや無理よ、野球なんて素人なんだし」

麗華がそう訴えるとフィリップは麗華のカバンを指差して、

「そう言いながら君も、結構やる気じゃないかね？」

と、本人は笑つたつもりなのか、傷だらけの顔を歪めて見せた。カバンの中には、学校の帰りに途中の書店で買った、野球入門の本が入っているのだった。

「今日の練習も逃げずに出たようだが

「だつて、ジンのお父さんとお母さんを悲しませたくないから……」

麗華は口を尖らせて呟いた。

麗華にとつては返つて頭の痛いところだった。

最早この世に未練など微塵もないはずの麗華だったが、あの優しい両親にだけは特別に後ろ髪を引かれる思いを抱きはじめていたのである。

「でも、止められるなら今すぐにでも止めたいわよ、いつたいいつになつたらジンの魂を取り返せるのよ？」

「靈界では専門の交渉人を立てるにした、もう少しの辛抱だよ」「そんな悠長なこと言ってて大丈夫なの？今こうしている間にも食べられちゃうんじゃないの、ジンの魂」

「それは問題ないね、ヤツらにはヤツらなりの儀式めいた決まり事があつてね」

フィリップはそこまで言つてから、「おや？」と床を見下ろした。

「お友達がきたよ」

「お友達？」

「私もそろそろ戻るとするか」

ちょっと待って、まだ聞きたいことが……

麗華がフィリップの背中に向かって叫ぼうとした瞬間、母親が階段の下から呼ぶ声が聞こえた。

お友達って、誰よ？

麗華が少しいらししながら降りて行くと、そこには遠藤が立っていた。

「こ……こんばんは」

なにしにきたんだろう

麗華は戸惑った。

意外といえば意外だし、明日の試合に備えてチームメイトが訪ねてくるのは、当たり前といえば当たり前とも言える。

だが、最大の問題はそんなことではない。

彼はゲイなのだ。

それも、カミングアウトするキッカケを狙っている、最も危険な男なのだ。

一人きりになつたら、急に襲つてきたりして

昼間のあの、意味深なワインクもなにかの伏線がありそうだ。そもそも仁と遠藤って、どんな関係だったんだろう。そんなに仲が良かつたのだろうか。

ほんの一瞬の間にあれこれ考えてみたが、結局相手の出方を伺うしかなさそうだつた。

「あのさ、お前が調子いい時のDVD持つてきたんだけど」

一瞬の沈黙が気まずかったのか、遠藤の方から先にそう切り出してきた。

「お前、今日なんだか調子悪そつだつたからさ」

「ああ、ありがとう」

それは麗華にとっては本当にありがたい話だった。

それだけならとつてもありがたいんだけど本当にそれだけ？
だが、そこまでしてくれている相手を帰してしまっわけにもいかない。

「まあ、上がつたら？」

麗華は恐る恐る誘つてみるのだった。

「……ほり、じりで一度軸足にタメを作つてゐだろ？そこから、体を開かないようにしながら一気に腕を振つて……」

「なるほど、そつするわけね」

麗華の警戒心を完全に裏切るよつて、遠藤の解説は的確で親切だった。

だが、じりで新たな疑問も湧いてきた。

でも、どうしてこんなに親切に教えてくれるのかしら？

同じチームメイトとはいえ、エースの座を狙うピッチャーコ士として、二人はライバルでもあるはずだ。

エースである麗華（仁）の不調は、第一投手の遠藤にとつてむしろチャンスのはずなのだ。

「あのひ、話は変わるんだけど……」

遠藤は一通りレクチャーが終わると、言い難そつて話題を変えてくるのだった。

「お前さ、今日、妙に、その、なんといつか、女の子っぽいといつか、その、可愛かつたじやん？」

やばい、やつぱりそつきたか

「そ、そお？」

「うん、昨日までと全然違つたよ」

「そんなに変わんな」と思つけどなあ

麗華は「こまかしながら、頭の中をフル回転させて考えていた。会話に緊迫感こそ全くないが、これは絶体絶命なのだ。

「お前、なにか隠してないか？みんなに」

「そ、そんなこと、ない、よ」

「昨日までの嫌われキャラも、本当は演技だったのかな、なんて」
本当の「ではない」ことを見破られたか。あるいは自分もゲイであることを隠している、などと誤解されたか。

遠藤は真っ青な顔になり、頬を震わせてためらっていたが、意を決したようだ。

「俺は演技してたよ」

と話はじめるのだった。

「俺、実は今まで、みんなに内緒にしていたことがあって……」

それは知ってる、知ってるから言わなくていいから、お願ひだから襲つてきたりしないで……つづうか、待てよ

「ちょっと待つて。やっぱりあるわ、隠してたのよ

麗華の頭に一瞬閃いたものがあった。

もしかして、この子だったら、というかこの子だからこそ解ってくれるかも

「や、やっぱり？」

遠藤は氣の毒になるくらい顔を輝かせ、笑った。

信じてくれようがくれまいが、もう、知ったこっちゃないわ

麗華は「誰にも言わないでね」と念を押した後、自分が本当は麗華という女子高生であること、自殺してからの今までのこと、そして生前の仁との関係も含め、全て打ち明けてみるのだった。

考えてみれば、これは麗華にとって、いくつものメリットが期待できる半面、マイナスになることは一つもないのだ。

例えば遠藤が信じてくれなかつたとしても、それは、仁といつ変態が世迷言のような妄想を語つただけで終わるだろうし、結果、この人の良さそうなゲイの青年をちょっと不愉快にさせるていどだろう。一方で仮に信じてくれたとすれば……。

遠藤は不安げな視線をあちこち泳がせてから目を伏せ、必死で頭の中を整理しているようすだった。

やっぱり信じられないか、仕方ないよね

当の麗華は落胆するどころか、返つてとてもすつきつした気分になつていた。

ところが。

「すごい、すごいわ、そんな話があるんだあ

遠藤は、両目にうつすらと涙さえ浮かべて、「素敵」とオネエ丸出しの口調で大いに感動して見せるのだった。

「つりやましいわ、そんな風に好きな男の子の体になれるなんて」最早、先に自分がゲイであることを告白する」とも忘れ、仁の心配もそっちのけで、すっかり上機嫌で身も心も乙女になりきっていた。「そうじやないんだつてば、もう好きでもなんでもないの」「あたしも憑依したいなあ

「だ、誰か好きな人がいるの?」

つつうか、その考えもきめえつつ

遠藤は真っ赤になつて「うん」とうなずくのだった。

な、なんか痛いな、そういうのも

「誰にも言わないでよ

まあ、聞いて欲しいんだろうけど

そう思いながら麗華は胸が痛むのだった。

「あのね、その子はね……」

えええつ?

大江戸大鉄君なんだけど。

同じ野球部かよ

しかも、あの堅物の。

「そ、そななんだ……」

麗華は当たり障りのないていどに、驚いてみせたのだった。

どこがいいんだろう、一体。

そう思つてみると遠藤の方から堰を切つたように語りだすのだった。

「彼つて、すぼらに見えるけど意外と細かいところまで気を使うのよ、例えば、部員全員の誕生日を憶えてるし、一年生までも

「ふーん……」

「試合であたしがピンチになつた時なんか、いつもマウンドまできて、変な顔したりして笑わせてくれるし……」

「ふ、ふーん」

遠藤はまるで決壊したダムのように、止め処なく喋り続けるのだった

た。

ついでに言ひなら、今まで抑えていた女言葉も思う存分満喫しているようだ。

麗華には遠藤の、その幸せそうな「本来の姿」が痛々しく、見ていて涙が出そうになるのだった。

大鉄のあの性格からして、恐らく女の子との普通の恋愛すらまだ、ほとんど未経験なはずだ。

そう考へると、遠藤の大鉄への想いが成就する可能性は限りなくゼロに近いだらう。

だが一方で。

好きだつた男にとことん裏切られ愛想をつかした自分と、報われる可能性のきわめて薄い片想いの遠藤と、いつたいどちらが不幸だといつのか。

麗華は、遠藤に対し今まで誰にも感じたことのない親近感が湧いてくるのを感じていた。

もしかしたら、こういうのを親友っていうのかも

こうして麗華は、生涯最高の親友ともを得、それ以来他にだれもいない所では「レイカ」「メアリー」と呼び合ひよくなつたのだが、このメアリーというのは遠藤の希望で、彼は盛遠といつ自分の名前が氣に入つていないのでそうだ。

ライバル登場

バックスクリーンの向こうには、入道雲がじつと動かすに球場を見下ろしている。

プラスバンドの演奏と蝉時雨に混じって、どこからかヘリコプターの飛んでいる音が聞こえてきて、麗華は思わず空を見上げた。

真っ青な空だ。

はじめて歩く野球場のグラウンド。

まるで大きなすり鉢の底を這っている、蟻になつたような気分だ。グラウンドから見上げる空は、いつも見ていてそれより丸く、青くて高いドーム型の天井のように見えた。

地球つてやっぱり丸いんだ、と麗華は歩きながらどうでもいいことを考えていた。

痛つ……

後ろから踵を蹴られて振り返ると、八郎が引きつった顔で「振り向くんじゃねえよ」とさわやぐ。

麗華をにらんでいるようだが、その視線は麗華の顔よりずっと後ろの、遠い所を見ているようだった。

よほど緊張しているのか、手と足が一緒に出ている。

あんたこそ、このくらいでアガつてんじゃないねえよ

とうとうはじまってしまった。

ゆうべあれから遠藤と外へ出てキャッチボールをした。

仁の家の近くにあるホームセンターの駐車場が、夜十時まで明かりをつけているのだ。

それが消えてからも家に戻り、深夜まで話をした。

野球のレクチャー、チームメイトの話、女の子同士?のため込んだお喋り。

特に女の子同士のお喋りはうれしかった。

一体何年ぶりだったか。

麗華は何年も溜めていた心の澱みを、洗いざらい吐き出し聞いてもらつた氣分だつた。

実際に心強い味方ができた。

自分が麗華であることを打ち明けて良かつたと思う。

相手がお人よしで夢見がちな性格の遠藤であることも幸いした。麗華本人も戸惑うほど、すんなり受け入れてくれたのだ。

もし相手が大鉄だつたら、どうだつただろうか。

麗華は前を歩いている大鉄の、大きな背中を見た。

恐らくこれっぽっちも信じない、だろうが、野球部にプラスになると解れば、話に付き合つて協力くらいはしてくれるのではないか。頑固で強情だが、決して因業な性格というわけではなさそうだ。遠藤の話では、思いやりもユーモアもあるらしいし、顔立ちだって、決して悪い方ではない。

仁のような優男とは正反対のタイプだが、時々見せる笑顔は確かに魅力的だつた。

なによりひた向きたと優しさがよく表に出た、好い人相……好相と言つていいだろう。

その気になれば、結構モテそうだけど

麗華はそんな風に考えてから、ハツと我に返つた。

ほんの一瞬とはいえ、大鉄を好意的に見ていた自分に腹が立つてくると、目の前の筋肉質の背中が無性に憎らしくなつて、蹴飛ばしたい衝動に駆られてくるのだった。

プラスバンドの行進曲に合わせて一歩一歩リズミカルに足を動かしているうちに、ついその一步を大きく前に踏み出し、気がついた時には膝で蹴つていた。

大鉄は反動で首を仰け反らせ「痛てつ」と短く呻くと、すぐに首を後ろに捻つて、

「なにすんだ、バカヤロウ」
と、麗華をにらみつけた。

その、あまりにも当たり前すぎる反応に麗華は思わず噴き出し、

そしてアカンベーを返すのだった。

仁と比べれば、絵に描いたような平凡な常識人なのだろう。

役員の挨拶が長々と続き、選手宣誓が終わり、球児たちは整然と野球場から退出する。

野球場の外では、つゝさつきまで牛のように黙りこくれて歩いていた高校生たちが緊張から解かれ、同じ色のユニフォーム同士で固まつて雑談に花を咲かせていた。

相変わらず緊張に青ざめている者。

力が余っているのか、チームメイトに格闘技の関節技をかけてふだけている者。

踏んでいる。

その中から不意に一つの顔が麗華の行く手を遮つて立ちはだかつた。

「おい」

と、そいつは不躾^{ぶしつけ}に声をかけてきた。

痩せているが、ひょろりと背だけが高い。

身長百八センチの仁の体でも見上げるほどの高さにある顔は、真っ黒に焼けている上頬がこけていて、ひどく小さく見えた。

「今年は去年みてえなわけにはいかねえからな」

と、神経質そうな眉間に深いシワを寄せてそいつは言った。

「え？」

麗華が、わけが分からずまじまじとしていると、

「いつまでも調子に乗つてんじゃねえぞ、こり」

相手はしごれを切らしたように凄んできた。

「三日月山高校のピッチャーの鳥羽だよ、去年準々決勝でうちこ負けたんだ」

いつの間にか遠藤が隣に来ていて、そう耳打ちをした。

「え？ ああ、よろしく」

麗華が右手を差し出すと、今度は鳥羽の方が「え？」と一瞬戸惑

つたようだつたが、すぐに「ふざけるな」とその右手を払いのけてしまった。

「去年は試合の後まで散々バカにしゃがって、急に優等生ヅラすんじゃねえよ」

「なるほど

「バカにしたんだ、ごめんね」

麗華が素直に謝ると、鳥羽は一度気持ちの悪いものでも見るよりな顔になつたが、すぐにまた麗華をにらみつけて、

「とにかくだ、今年は準決勝まではお前えと試合ができるねえ、もつとも、お前えの方が負けずに勝ち上がつてくればの話だがな」と、口の端を歪めて笑つた。

「うん、その時にはよろしくね」

麗華は満面の笑顔で返した。

仁になつて二田田ともなると、麗華も次第に慣れて余裕が出てきたのだ。

要するに、どんなに相手から怒られようと、罵られようと挑発されようじと、それは仁が言わせているだけなのである。

鳥羽はいまいましげに「けつ」と顔を歪めて、

「せいぜい頑張るんだな」

と背中を向けて行つてしまつた。

麗華はそれを見送りながら、短く溜息を吐いた。

まったく、どこまで敵だらけなんだか、このバカ

恐らく試合で負かされた後になつてまで、仁に余計な戯言ぎげんでも言われたのだろう。

「あ、今度は向学大付属高校の足利が来た」

遠藤がまたささやいてきた。

「去年うちが準決勝で負けた学校の四番よんばんだよ

「やあ」

足利は鳥羽とは対照的に、仁にやかに握手を求めてきた。

「か、かつこいい

身長は「より若干低いが、その風貌と体つきはまるでデーターベルマのよう精悍である。

「今年も君とこうして再会できて嬉しいよ」

「うん、やうだね」

「幸運と言つべきか、不運と言つべきか、君のチームとは決勝まで当たらないが、君たちならきっと勝ち上がつてくれる信じてるよ」
かつこいいけど、なんかやつぱり違う

足利の態度は懲勵無礼というか、どこか堅苦しきれどもいろいろがある。

「去年はたまたまうちが勝たせてもうつたが、勝負は時の運だ。

今年もいい試合をしよう」

「彼の先祖は、昔このあたりを治めていた殿さまなんだって」
遠藤がまた耳打ちをしてきた。

な、なるほど

「僕にとって君は永遠のライバルだ、健闘を祈るよ」

「うん、君もね」

どうして野球やる人って、みんないつもキャララが濃いんだろう

「去年は彼の学校が甲子園に出て、ベスト4まで勝ち進んだのよ
足利の背中を見送りながら遠藤は女言葉でしゃべった。

「そんなに強いの？」

麗華は知らなかつた。

去年は「と別れて、野球は全く見る気になれなかつたのだ。
遠藤はため息をつきながらうなずいた。

「去年の感じでは全く勝てる気がしなかつたけど、それは上級生
にすごいピッチャーがいたからなの、今年はその人が卒業したから
まだなんとかなりそうだけど、でも強敵には間違いないわね」
麗華は遠藤と顔を見合させ、肩をくすめた。

「冗談じゃないわ、そんな先のことなんて。今日の試合だつてかなり危ないのに」

「大丈夫よ、相手の篠淵高校は強くないから、普通にやればうち
がコールドで勝てる相手だし、あたしが投げても完封できるような
チームなの。ほんとにだめだったらあたしがいつでも代わってあげ
るから」「

遠藤はにつこりと微笑んでそう言つてくれた。

口調は別として、その笑顔は麗華にはひどく頬もしくみえるのだ
つた。

麗華、マウンドに立つ

まづいな……

大鉄は思わず不安を顔に出しそうになり、慌てて押し止めた。
試合前の準備投球のため、マスクを被っていないことを思い出したのだ。

自分が先頭になつて青ざめた顔など見せたら、やつはますます硬くなるだろ？

とにかく「」をこれ以上追いつめるのはよくない。

もともと仁は神経質でアガリ性で、立ち上がりは悪いのだ。
だが、今日の調子は特にひどい。

球がまったく走っていない。

本来、仁のストレートはマックスで百四十七キロ出るのだが、どういっつわけか今日は百三十五キロも出でていないのでないか。
セーブしているのか？準備投球だから

いや、そうじゃない。

投球フォームがいつもと違う。

どこかギクシャクしている。

それに、変化球も全然だめだ。

仁の球種は、ストレートとスライダーとフォークボール。

スライダーは確かに曲がるが、全くキレイがない。

これではちょうど打ちごろだ。

その上、ストレートに比べ極端にコントロールが悪くなるようだ。いや。ストライクゾーンから外れてくれるならまだいいが、間違つて真ん中などにきたら、今日の相手でも打たれるかも知れない。
フォークは要求しても投げようともしない。

元来やつはフォークに関しては特に神経質で、試合前にはしつこいほどチェックするのだが。

どうする？

怒鳴りつけて気合を入れるか。

おだててリラックスしてもらつか。

やはり、彼女の自殺のショックから立ち直れていないのでさう。

当たり前だ、立ち直れるはずがない。

まだ一昨日の話なのだ。

今日の相手ならこれでも勝てるだらうが、なんとかして立ち直るべきつかでもつかんでもらわないと、予選を勝ち抜くのはとても無理だ。

その上観客はほぼ満員である。

予選の一回戦としては異例の盛況ぶりだ。

皆仁を見にきたのだ。

甲子園出場経験こそないがプロのスカウトの目に留まっているという噂を、皆よく知っているのだ。

特に地元の沢谷香市では、町おこしの期待も込めて、市長までが仁に注目しているという噂だった。

長い高校野球の歴史の中で、沢谷香市は一度も代表校を輩出したことがなかつたのだ。

これで緊張するなという方が無理といつものだ。

怒鳴りつけるのは逆効果だらう

やつは心底俺を恨んでいるようだ。
現にさつきも背中を蹴つてきた。

あんなことくらいで恨みが消えるとは思えないが、少しでもやつの気が晴れるなら、いくらでも蹴られてやるわ。

マウンドの上つて、こんなに暑かつたのね

麗華は早くも汗びっしょりだつた。

キヤツチャーの大鉄までの距離も、想像していたよりずっと遠く感じる。

応援席では仁の父と母が、期待と不安の込もつた眼差しでじゅうじゅう

を注視している。

父親は仕事を休んで見にきたのだった。

ゆうべの遠藤との特訓の甲斐があつて、見た目はなんとかピッチヤーらしいフォームになつてきたが、直球とスライダーはともかく、フォーカスは全く無理だった。

とても一朝一夕で体得できるものではなかつたのだ。

投球練習が終わると、大鉄が笑いながら駆け寄つてきた。

「なんだよお前、またアガつてんのか？」

大鉄に挑発されて、麗華は少しむきになつた。

「え？いや、そうでもないけど……」

すると大鉄は笑いながら、「俺もアガつてんだけよ」と麗華の肩を叩いた。

「緒戦だから無理もないぞ、でも、今日の相手はお密さまだ、落ち着くまではサインなんかいいから、全部ど真ん中に思いきり直球投げてこいよ、溜まつた鬱憤を晴らしてやれよ」

結局、どうしてもあたしが投げなきゃなんないね……

ブルペンでの投球練習で、仁がいつもの調子の見る影もないほど

の状態であることくらい大鉄が一番判つたはずだった。

だが、もしかしたら今日は遠藤でいつてくれるのでは、と密かに寄せていた期待も裏切られてしまつたのだった。

「試合終わつたらまた満腹亭で特盛りラーメンとジャンボギョーザ食つて帰ろうぜ、おごるからさ」

大鉄は真っ黒に日焼けした顔に白い歯で笑い、ホームベースに戻つて行つた。

結構いいやつ、認めたくないけど

麗華は一度、大きく深呼吸した。

甲高いサイレンが、有無を言わせぬほどの大音量で鳴り渡つた。もづ、後戻りはできないのだ。

ちなみに試合に臨む沢谷香高校のオーダーは次のとおりである。

一番ショート 牛若小次郎

一番センター 花北沢悟
三番サード 鎮西八郎
四番キャッチャー 大江戸大鉄
五番ファースト 高橋エンリケ^{メアリー}誠
六番ライト 遠藤盛遠
七番セカンド 柏薔薇魔裂
八番レフト 梶原景時
九番ピッチャ― 藤村仁（麗華）
「ここまできたら、やれるといまでもやるだけよ
麗華、振りかぶつて、第一球。
「うおおおつ……」
観客がどよめいた。
あれ、なに？
バッターが倒れている。
主審が「デッドボール」と叫んだ。
しまった

すかさず相手のベンチやスタンンドからヤジが飛んでくる。
いや、相手からだけではなかつた。

「おいおい、たのむぜ」

カードを守つている八郎が、土を蹴つて聞こえよがしこブツブツ
言つてゐる。

「やれやれ、天才のやることってな理解できねえよ
ショートの牛若がそれに続く。

「ドンマイ、真ん中投げよう真ん中」

キヤツチャーの大鉄とライトの遠藤だけが、そんな意味のことを
叫んで励ましてくれた。

ファーストのロンリケは、ぼんやりと相手の応援席をながめてい
た。

恐らくチア・ガールを見ているのだ。
どうしたんだろう？練習ではちゃんとストライクが入るようにな

なつてたのに

実を言つといへば、麗華には解らない不運がいくつか重なつてゐた。

硬式の、試合で使うような新品のボールというのは、それなりの投球力のある者が投げると、思いもよらない変化をすることがあるのだ。

麗華は直球を投げたつもりだったが、それがほんのわずかだが汗で滑つてショートをしてしまい、しかも相手の打者は、最初からヒットを打つのが難しいことを見越して、かなりベース寄りに被つて構えていたのである。

麗華は新品のボーリを投げるのは、これがはじめてだつたのだ。
味方の罵声まで浴びる四面楚歌だが、とにかく考えて仕方ない
かと、気持ちを切り替える。

意外とマウンド度胸はあるのだ。

「うう時は、一墨に牽制球つてのを投げるのよね
麗華は冷静に自分の置かれた状況を把握していた。
だが。

主審がまた叫んだ。

主審がまた叫んだ。

なまじ平常心があつたことが返つて裏目に出てしまい、投げなくてよい牽制球を投げ、しかもボーグになつてしまつたのである。結果、ノーアウトでランナーが一塁に行つてしまつた。

麗華はまだ、一球しか投げていない。

今度は強手のヤジはつ昇く、ハ郎が怒鳴る。

「またぐ、乗っけからじこと」

ぼ、ボーグつて、なに？

それは麗華にとって、はじめて聞く言葉だった。

麗華が見ていた試合では、仁はボーグ、つまり反則投球を一度も

やつたことがなかつたのだ。

今麗華がやつたのは、プレートを踏みながら打者に足を踏み出して
つまり、打者に向かつて投げるフォームで　一墨に投げる、
といふ初歩的なボーグだつた。

なにがなんだか分からぬ、一体どうすればいいのよ
麗華もさすがに平常心を失い、呆然としてしまつた。
ピッチャーにとつて立ち上がりのボーグは、ヒットを打たれるより
心理的に辛いものなのである。

「タイム」

大鉄が駆け寄つてきて、内野手を集めめた。

「お前ら、さつきから味方なんかヤジつていい加減にしろよ
ハ郎と牛若を咎めたが、顔は相変わらず笑顔である。

「ヤジじゃねえよ、愛のムチだよ」

ハ郎が苦々しげに吐き捨てる。

「そうそつ、叱咤激励、切磋琢磨つてやつだね」

牛若が他人事のようにうそぶく。

「まあ、まだ点取られたわけじゃないさ」

大鉄が麗華に微笑みながら言つた。

「牽制球は投げなくていい、ランナーは気にすんな。今日の試合は
三点や四点取られたつて大丈夫だから、なにも考えずに投げてこい
よ」

麗華はその笑顔と言葉に救われ、少し落ち着きを取り戻して「うん」とうなずいた。

な、なんか、認めたくないけどありがと
だが。

「バカヤロウ、緒戦の弱小相手だからこそ、完璧に勝つて勢いをつ
けるんじゃねえか」

ハ郎が割つて入つてくる。

「そうそう、獅子はつさも相手にも全力を尽くすつてやつだね
牛若がそれに続く。

「分かつた分かつた、打たせるからお前ら完璧にやれよ、つちの守備にはつけ入る隙なんてないってところを見せつけてやるぜ」大鉄は笑顔で二人をなだめてから、鋭い目になり「しめていくぜ！」と気合を入れた。

八郎も牛若も「おう、あたりめえだ」「どんどんこいや」と口々に叫びながら守備に散つて行つた。

大鉄は一人残り、再び麗華に笑顔を向け、

「みんなまだ、硬さがとれなくてイライラしてんだけよ、野手つてのは、最初の打球を捌くまで落ち着かないからな。ランナーは気にしなくていい、お前はバッターに思いつきり投げるだけでいいよ、ヒット打たれてもいいから打たせていこうぜ、あいつらにいつぱい仕事してもらおう」

そう言い残して戻つて行つた。

すごい

麗華は遠藤の言葉を思い出した。

試合になると本当に頼もしいやつ。

まるで別人のように生き生きとしている。

あんな曲者連中を、ほんのわずかのやり取りで、調教師のように操つてしまつた。

大鉄自身だつて、緒戦の不安は同じはずなのに。
それになんという目をするのだろう。

あれは子供が、楽しい遊びに夢中になつてている時の目だ。

生きているのが楽しくて仕方ない、という目だ。

そんな目で見られ、麗華もいつの間にか落ち着きを取り戻しているのだった。

次のバッターは早くもバントの構えをしている。

「いいぞ、やらせろやらせろ」

大鉄が両手を広げて大きく構えた。

バントなら、何度も見たことあるわ

麗華は投げるのと同時に飛び出す。

だが。

「うわっ、痛てえ！」

夢中で打球を追いかけて、ハ郎とぶつかってしまった。

麗華もそのまま倒れ、一塁・三塁オールセーフになってしまったのだつた。

「バカヤロウ、テメエはファーストのカバーだよ……つうか、初球から簡単に三塁線にバントさせんな、このドアホウ！」

ハ郎は真っ赤になつて麗華に食つてかかつた。

な、なによ、カバーってなに？ピッチャーッ投げるだけじゃないの？

麗華は再び、なにがなんだか解らなくなつてしまつた。

マウンドに戻りながら、スタンドを見上げると、仁の父親がうなずきながら、こちらに向かつてなにかを叫んでいる。

隣の席では母親が、お祈りをするように両手を合わせ、強く目を閉じてうつむいていた。

その上の座席を見て麗華は愕然とした。

そこにはあの胡桃美琉久がいたのだが、その目。

遠くから気味の悪い動物でもながめているような、蔑んだ目でこちらを見下ろしていた。

好きな男が頑張つているのに、よくあんな目で見られるわね
麗華は唾を吐きたい気分だつたが、今はそれどころではなかつた。

次の打者へ、第一球。

はじめてストライクが取れたが、一塁ランナーには簡単に走られ一塁に行かれてしまつた。

だが、これでなんとか、ストライクを投げる感触はつかめた。

第二球。

「走つた！」

麗華が足を上げたといふで、サードのハ郎が叫んだ。

大鉄はその声より早く、立ち上がつていた。

相手のスクイズを完全に読んでいたのだ。

だが。

え？

普通にストライクを投げるのが精一杯の麗華が、投球動作の途中からウエストボールを投げることはできなかつた。

ボールは大鉄のはるか頭上に逸れ、大鉄が思い切り飛んでも届かなかつた。

二人のランナーが次々と、ホームに還つた。

ホームのカバーに入つていたハ郎が、グローブをグラウンドに叩きつけて麗華になにか怒鳴つている。

用もないのに、小次郎が麗華の隣まできて、小声で、毒を吐き捨てるようになにかささやいている。

だが麗華にはなにも聞こえず、視界に入る景色も陽炎のように歪んで揺れているのだった。

しばらくの間、遊びにまぜてもうえない子供のように、そうして立ち尽くしていた。

かなり長い時間だつたような気がするが、時間にすれば一分もたちになかつたかも知れない。

やがて、真っ暗なベンチから監督が姿を現し、ピッチャー交代を告げるのを、麗華は他人事のようにながめていた。

大鉄と遠藤が近寄ってきて、なにか優しげな声をかけてくれたようだつたが、結局その二人に促されベンチに下がつた。

「お前はもう必要ない」と、その時誰かが言つたような気がした。ハ郎だつたようでもあるが、誰も言つていなかつたようでもあつた。

結局この世に必要のない人間

自分の心の中の自分がそつとささやいたようだつた。

ベンチに戻る際、スタンドの仁の父親と目が合つた、父親は真っ直ぐに麗華を見てうなずいていた。

母親は両手で顔を覆つていた。

その後ろの座席に美琉久の姿はなかつた。

探す気もなかつたが、近くの大きな出入り口の階段に向かつて歩く

姿がすぐに見つかった。

出入り口脇のゴミ箱に沢谷香高校の応援の小旗を捨て、そのまま階段を降りていくのが見えた。

泥試合の後も泥沼？

自転車で橋の所に差しかかると、にわか雨はつそのようにあがり、強い日差しが戻ってきた。

いつの間にかあたりの木々では蝉が啼いている。
シャワーのような雨に打たれ、下着までずぶ濡れになると麗華は返つてすつきりした気分で、いつもより少しだけ水嵩の増した川の流れをながめていた。

終わった

試合後のミーティングは、まるで負け試合のように重苦しく沈んだ反省会だったが、最早誰一人麗華を責める者はいなかつた。それはまるで欠席裁判のようだつた。

あたかもその場に麗華がいないかのように、「今後遠藤でどう戦うか」ということにばかり議論は終始したのだ。

試合は十対四。形の上ではうちの完勝だつた。
だが、完封、コールド勝ちで当たり前と思われていた相手に思わぬ苦戦を強いられた八郎たちチームメイトは、怒りを通り越して完全に麗華を見限つていったようだつた。

「監督、俺にも責任があります」

大鉄がそう言つて、全員にかけ合つてくれた。

「こいつ一昨日、付き合つていた女の子が自殺したんです、俺が二人の交際をじやましてたんです、こいつはまだ、ショックから立ち直れていないんです」

遠藤もそれに被せて、麗華を弁護してくれた。

みな、そのことは初耳だったようで、一応驚いて見せたが、彼等が長年くすぶらせていた麗華への不信感を覆すには及ばず、結局一人の意見は隅に押しやられてしまったのである。

麗華もそんなやり取りを、薄笑いを浮かべながら聞いているしかなかつた。

もう、いいよ

みじめさも度を越えると、そんな力のない嗤いしか出でこなかつた。

これで自分の無力さは証明された。

次の試合から遠藤の先発でいい。ただそれだけのことではないか。

「今から遠藤の先発を想定した練習をしよう」

練習オタクの八郎がそう言い出したところへ、にわか雨が降り出し、ミーティングが解散になつたのである。

麗華にとつてはそんな雨も渡りに船だつた。

「肩が冷えるから」と心配する大鉄を振り切つて、逃げるように帰つてきたのだった。

とにかくこれで終わつた。

形はどうあれ、試合は勝つたのだし良かつたではないか。

次の試合は十七日。

七日もあれば、いくらなんでもフイリップだつて仁を連れ戻してきてくれるだろ？

これで思い残すこともなく、自分も靈界に行けるのだ。

川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず……か
川の水はいつもより濁つていて、仁の顔が映ることはなかつた。

早ければ今日、明日にでもこの体から出られるのだ。

一応やることはやつたんだから、木にされるなんてこと、ない

よね

麗華は苦笑しながらペダルを踏み出した。

仁の家に着いて玄関の前にしばらく立ち廻くした。

仁の両親は、さぞがっかりしているだろ？

恐らく、一人して努めて明るく振舞い、当たり障りのない言葉をかけてくるに違ひない。

だが、自分は決してこれに同調してはいけない。

うつかりそんな優しくに引き込まれたといひで、お互ひに良いことなどないのだ。

自分がこの世に未練を残すより、わざと「と交代してもらった方が、チームにとつてもあの両親にとつてもよい結果になるのだ。そう考へると、麗華は少しだけ寂しい気分になつたが、自分は自分でのことを考えて「あの世」へ行こうと、割り切るのだった。麗華の最後の務めとして、彼らと同じように明るく振舞い、こちらも当たり障りのない言葉を返していればいいだけのことなのだ。麗華が扉に手を伸ばすと、扉は中から開けられた。

中から顔を出したのは仁の父親だった。

「なんだよお前、そんなに濡れて、とにかく着替えてこいよ」

その様子を見て麗華は少し拍子抜けするのだった。

父親はがつかりした様子もなく、不自然に明るく振舞うでもなく、そう声をかけてきた。

もしかしたら、それは麗華が知る限り最も自然な「お父さん」の顔かも知れなかつた。

キッチンのテーブルには、今日の祝勝会のために用意したらじいご馳走がところ狭ましと並んでいた。

しかも今度は肉ではなく、寿司や刺身ばかりである。

「今までお前にはすまないこととしたな」

麗華が着替えて椅子に座ると、父親が正面に座り静かにそつ言つてきた。

母親はぎつとうちらに背を向けたまま、鍋でなにかを煮込んでいた。

「え？」

芝居がかつた励ましの言葉を予想していた麗華が驚くと、父親はゆっくりと続けた。

「お前、苦しかつたんぢゃないか？子供のこゝからみんなに期待されて」

「そ、そんなことない……と、思つ」

父親は珍しく居住まいを正し、正面から麗華を見ている。麗華に向かつて「まあ、食いながら聞けよ」と勧めると、淡々と語りだした。

「お父さんもな、正直なこと言つちまうと、そりや確かに期待してたさ、こんなしがない小さな町工場の作業員の息子が、甲子園にてプロに入つて稼いでくれるかな、なんてな。俺たちもそんなお前のことを確かに自慢に思つていたよ。でも、それはお前に俺みたいな人生を歩んで欲しくなかつたからそう思つてたんだよ。でもな、野球でプロなんぞになるより、お前がこの一回間、どういうわけか急にいい子になつてくれたのが、お父さんもお母さんもどれだけ嬉しかつたか、お前のお陰で俺も母さんも目が覚めたよ」

「目が覚めた……つて？」

「お前が苦しんでいるのを知つていながら、上手に励ますことも、お前の我儘を叱ることもできなかつたのは、決してお前に対する優しさなんかじやなく、俺たちが逃げていただけだつてことさ。仕事場でちょっとお前の自慢がしたいとか、高校を卒業したら少しお金稼いでくれるんじやないかなんて、結局自分のことばかり考えてたわけさ。それがお前のためになんか、これっぽっちもなつていないつて気がついた時には、もつ手遅れだつた」

麗華は「うつ」と息を漏らし、肩に下げていたタオルに顔をうずめた。

自分の中で、なにかが壊れる音が聞こえたようだつた。
それは、自分の感情を抑えていた堰が壊れる音だつた。

涙が、後から後から止まなくなつた。

「もう、いいじゃないか

と、父親は言つた。

「地元の英雄とその親、なんて肩書きは、もういいじやないか、次の試合で負けようが、野球辞めようが、お前がいい子になつてくれさえすれば俺たちはそれで充分だよ、お前はやっぱり俺たちの自慢の息子だよ」

そつ言つと父親は幸せそつな顔で笑つた。

「なあ母さん」

父親が声をかけると、母親ははじめて振り返つて「ええ」と笑つた。

「まるで仁が小学校の……野球をはじめると戻つてくれたみたいだつたわ」

母親の目は真っ赤に腫れ上がつていたが、その顔は晴れやかだった。

「思い出すよなあ……」

母親の言葉につられて、父親は遠い目をしながら湯呑み茶碗を口元に持つていつた。

今日は晩酌をしないつもりらしい。

「だめよ、お父さん」

麗華は堪らず叫んでいた。

「まだ大会は終わつたわけじゃないんだから」

麗華が激しく首を振ると、涙があたりに飛び散つた。

だが、それだけ言ってみたものの、その先の言葉が出てこない。説明のしようもないのだ。

両親はしばらく驚いたような顔で呆気にとられていたが、お互いに顔を見合わせ「ああ、すまんすまん」と父親が慌てて謝つた。

「そうだな、大会はまだはじまつたばかりだつてのに、負けるとか辞めるなんて不謹慎なこと言つちまつたな」

「そうじやないの、違うんだつてば

「とにかく、今日のあたし……俺、は本当の俺じやないんだから」

麗華がそう言いかけた時、玄関のチャイムが鳴つた。

「大鉄君がきてるわよ」

戻ってきた母親が、麗華に告げた。

.....

「一体、なんて言つて声をかけりやいいんだよ

「仁の家までみてみたものの、自分がなにを言いにきたのかという説明すら大鉄はできぬいでいた。

励まし、叱咤、最後の忠告、お別れの挨拶。

はつきり言えばその全てなのだが、いくら叱咤激励したところですでに手遅れとも思えた。

思えばこれほど扱いの難しいピッチャーもいなかつた。

おだてれば図に乗りやすくなるし、叱りつければ腰を曲げて練習を休みやがる。

せめて八郎の半分でも練習してくれれば。

それでも本番の試合で見せる速球の非凡さは本物で、だからこそ自分もそれに惚れ込み、数限りない理解不能の悪ふざけにも付き合つてきたのだった。

昨日からの気持ちの悪い女言葉も、責任の一端を感じているからこそ聞き流してきたのだ。

責任は確かに自分にある。

だが、今日の試合でのやつのプレーは、ただの感情のこじれからきているだけではないのではないか。

あまりにもひどすぎる。

小学生だって、あれほどひどくはあるまい。

ただ単に体調が悪いとか、集中力がなくなっているとかのレベルではなかつた。

そうだ、その原因を見極めるのが、俺の最後の責任だろ

みんなは強がつてあんな風に言つてゐるが、次の相手の田蒲学園はそんなに弱い学校じゃない。

遠藤一人では、恐らく勝てまい。

なんとかあいつとみんなを繋ぎとめる橋渡しでもできれば。

それには、あいつと腹を割つて話を聞いてみなくては。

玄関から出てきた麗華の顔を見て、大鉄は一瞬目を見張つた。

いくらタオルで涙を拭いても、麗華の目からはまだ涙があふれていたのだ。

「お前、そんなに悔しいんだつたらひもつと練習まじめにやつてねば……」

大鉄があきれて咎めると、麗華は「ごめん」とやえさつた。

「まじめに練習するから、見捨てないで」

そう言って抱きついてきた。

さ、気持ち悪いな

「練習するつて、今からか?」

「うん」

「遅くねえか?今さ!」

「死んだ気になつてやるわ……一度死んでるからそれは大丈夫」「死んでるつて……ま、またわけわかんねえ」

「とにかくお願ひ、いろいろ教えて、なんでも言つこと聞くから、もう少しじだけ付き合つて」

「俺にできることならなんでもするナビ……」

大鉄はそつ言いかけて、背後に強い気配を感じて振り向き驚いた。

「え、遠藤……」

遠藤が呆気に取られて立ち竦ぐしていた。

麗華は「きやあつ」と悲鳴をあげて、大鉄と離れた。

きやあ?

「ち、ちがうのよ、そりじゃないのよメアリー

メアリー?

「お前、いつからそここいたんだよ?..」

遠藤は後退りしながら「さつきからずつと」と麗華と大鉄を見比べた。

「仁^{じん}が落ち込んでると思って、大黒屋のケーキを買ってきましただけ

ど……」

「誤解しないで、別に変なことしてたわけじゃないんだから」

麗華の言葉で混乱していた大鉄も我に返つて「そ、そうだよ、誤解だよ」と苦笑いした。

「俺、そんな気持ちの悪い趣味ないから、ははは……」

だが、遠藤は余計に悲しげな目になり、

「そんな、気持ちの悪い趣味つて……」

と、泣き出しそうになるのだった。

人の思いといふものは、言葉にしなければ伝わらないことがある。

だが、言葉にしたところで伝わらないこともある。

この三人にとつて幸運だったのは、大鉄という人間が、自分の頭で

理解できない」とを敢えて理解しようとしたことなのだろう。

「一体どこまで面倒なんだよ、こいつら大鉄の頭では、そこまでが精一杯だった。」

それぞれの夏

「おーー一年ーー」

鳥羽茂男はグラウンドに入るなり、額をひくつかせながら怒鳴った。恐ろしい形相だ。

三日月山高校野球部、総勢一十三人の一年生部員は全力疾走で鳥羽の前に集合した。

皆血相を変えて、中には「ひつ」と小さな悲鳴を漏らしている者もいた。

突然の「集合」だが、皆よほど慣れているのか、まるでマスゲームのように整然と鳥羽の前に整列する。

無礼なほどに綺麗な「気をつけ」の姿勢は、一糸乱れぬ緊張感で今にも張り裂けそうだつた。

「とりあえず跳べや……」

「跳べ」とはジャンピングスクワットをしろという意味だ。

「とりあえず」で三百回。

「しばらく」で五百。

「いいといつまで」で千回、以前には「二千回になる」ともあった。

「跳びながら答える」

鳥羽は、人嫌いな野良犬のような濁つた目で、一年生部員を見下ろしている。

身長百九十三センチの鳥羽の顔は、一年生がジャンプするより高い位置にある。

真っ黒に焼け、瘦せた顔の眉間に怒り皺を寄せると、とんでもなく迫力があった。

「お前ら、タマに洗濯させてただる?」

「一年生たちの黒目が一斉に小さくなつた。

「なんで一年生にやらせないのかなー?」

鳥羽はあるで幼稚園児にものを尋ねるよつて首をかしげるが、その

充血した目は殺氣をはらんで大きく見開かれている。キレる寸前の目だ。

「し、知りませんでした」

鳥羽の正面の男が飛びながら答えた。

「今年の一年生さまはずいぶんとお偉いんだね、おい。三年の玉川

たまがわ

先輩に洗濯までさせるんだもんねー」

「すいませんす」「知りませんでした」

一年生たちは真っ青な顔で、口々に叫んだ。

彼らにとつては、寝耳に水だった。

三日月山高校野球部では、三年生と一年生は直接口をあべることすらない。

一年生のしでかした不始末は、一年生が責任をとる決まりなのだが。一年生の仕事であるグラウンド整備や洗濯などの雑用に、一年生が付きつきりで指示を出すのは、せいぜい最初の一週間である。

一年生が四月に入部して三ヶ月もたつこの時期に、ほとんど目が行き届かなくなっているのは、むしろ当然といった。

逆に、入部してまだ三ヶ月しかたっていない一年生が、三年生である玉川太に、「自分が洗濯する」と言われ、断われるのはむしろ当たり前でもあるのだ。

「てめえら、そのうちケツまで拭かせる気なんじゃねえか?俺らに」鳥羽がそう言って全員をにらみつけた時、グラウンドの外から一人の部員がのそと走り寄ってきた。

身長百六十センチの短たんくはぼっちやりと太り氣味で、短い手足をばたばたと泳がせながら走る不様な姿は、とても野球部員とは思えない。

「シゲちゃん、もういいよ、俺がやるって言つたんだよ

玉川太は鳥羽の隣にくると、子供が親にすがりつくように見上げて言った。

長身の鳥羽と小太りの玉川が並んで立つていると、まるで一昔前の漫才コンビのようである。

「だから、なんでテメエがやんだけバカヤロウ、そんなこたあ一年坊にやらせとかよ」

「だつて、他に俺にできる」となんてないし……」

玉川は口の中でそつづぶやいて一度うつむいてから、

「みんな、ごめん。俺が悪かったんだよ、やらなくていいよ」と、一年生に向かつて両手を振った。

鳥羽はよけいに目をつり上げて、「つるせえ」と怒鳴った。

「見せしめだ、全裸じがらく跳んどけや」

そう吐き捨ててその場を離れてしまった。

「とりあえず」が「しばりぐ」になってしまった一年生たちは、それでも返つて安堵の表情で、「うつあんです」と元気よく返事を返した。

「いいと畜づまで」と言われなかつただけまだましなのだ。

一年生たちは、その地獄絵図を呆然と見てゐるしかなかつたが、中にはべそをかいて泣き出す者までいるのだった。

玉川は心配そうに何度も一年生たちを振り返りながら、鳥羽の後について歩いていた。

「なあシゲちゃん、もういいよ、止めをかけてやれよ

だが、鳥羽はそれには答へず、

「お前えはベンチ入りしたんだぞ、こつまでも雑用なんぞしてんじゃねえよ」

と言つた。

「だつて、それはシゲちゃんが……」

玉川のベンチ入りは鳥羽が監督に強く推薦して、強引に決めさせてしまつたのである。

「関係ねえよ」

鳥羽は吐き捨てるように言つてから、薄笑いを浮かべて、

「どうせ誰がスタメンになつたって、誰も打てやしねえんだからよ、うちのチームは」と鼻で嗤つた。

「全員案山子だよ、力・力・シ……泣けるぜ、女の子入れたつていいくれえだよ」

玉川が回りを見ながら「シゲちゃん」と鳥羽の腕を引っぱる。近くにいる三年生たちには、一人のやり取りが全て聞こえているようだつたが、皆聞こえないふりをしていた。

玉川は鳥羽の幼なじみだつた。

もつというなら、たつた一人の友達である。

人一倍大きな体と、その猛獸のような性格が災いして、誰一人近寄つてこようとしない鳥羽と、気が優しくお人好しだが、見た目と性格の鈍臭さで回りの人間からほとんど顧みられない玉川。

体格も性格も正反対だが、周囲から孤立している点においてだけよく似たこの二人はなぜか子供のころからウマが合つのだつた。

「俺はシゲちゃんと一緒に野球ができるだけでいいんだよ」

それが玉川の口癖だつたが、野球のセンスはその外見どおりゼロで、チーム内では一年生も含めて最も下手だつた。

しかし、本人もそのことはよく理解していて、練習よりも雑用に熱心で、いまだに一年生がやるような仕事でも喜んでやつていてるくらいなのだが、そんな先輩の姿は下級生から見ても野暮つたく見えるもので、一年ほど前に下級生の中から彼に軽口を叩く者まで現れる。何年か前に多摩川に出現したアザラシに彼の見た目と名前が似ていることから、そのまま「タマちゃん」というあだ名で呼ぶ者ができるてしまったのである。

玉川本人は全く気にしていなかつたが、これが運悪く鳥羽の耳に入り逆鱗に触れ、今の二年生全員が二千回「跳ばされた」のが、実はこの時だつたのだ。

「ああああ、ちくしょうめ！」

鳥羽は無性にいら立つ自分を抑え切れないように絶叫したが、グラウンドにいる者は誰も振り向きもしなかつた。

はじめて見る者にとっては異様な光景かも知れないが、これはいつものことだつた。

試合が近くなり、練習が軽いメニューになると、鳥羽は力を持て余し、傍目も気にせず爆発的な不機嫌さをまる出しにするのである。鳥羽のそんな姿はさながら、エサを求めて咆哮しながら徘徊する肉食恐竜のようである。

「チーム打率一割のスタメンが聞いて呆れるぜ、センスの無さじや全員がお前えといい勝負なんだよ」

だが、鳥羽が嘆くのももつともな話で、チーム打率一割といつのもほとんど鳥羽が打つて上げているアベレージであり、つまりこのチームの勝った試合のほとんどは鳥羽が完封し、自分で打つてきているのである。

「三百球……？」

「投げ込みを？」

八郎と牛若が目を丸くする。

「合宿ん時だつてそんなに投げなかつたじやん、あいつ」と、八郎。

「まさに急け者の節句働きつてやつだね。もう大会はじまつてんのに、今じろそんな無理したつて体壊すだけじやんかよ」と、牛若。

「それに疲れだつて残るだらうが」と、二人顔を見合わせてうなづき合つ。

大鉄は「なんだよお前ら」と、皮肉っぽい笑いを返す。

「あいつはもう戦力外なんだろ？ 今さら体壊したつていいだろが別に」

「まあ、そりやそうだけどね」

牛若が苦笑いしながらうなづく。

「実は昨日も家に帰つた後、俺相手に一百球投げたんだよ。いや、手のひらが痛てえ痛てえ……」

大鉄はわざと満足そうな笑みを浮かべながら左の手のひらを一人に見せた。

本当は百五十球だつたのだが、みんなの氣を引くために少し大きさに吹聴しているのだ。

「ほんとかよ？」

練習と聞くと、たすがに八郎は喰いつきがいい。

「冗談じやないよ」

最も反発したのは、仁に次いで練習嫌いのエンリケだった。

「やつと大会がはじまつて、練習が少なくなつたつてのに、こつちまでとばつちりがくるじやないの」

「いやいや」

と大鉄は首を振つた。

「お前が仁の球受けりやいいだる、チントラ守備練してるより楽だぜ」

「なるほど、そうだな」

エンリケは田を輝かせ、あつさり快諾した。

この大男は「樂」と聞くと喰いつきがいいのだ。

「けつ」

と、八郎は吐き捨てた。

「バカ言つてんじやねえよ、たつた一週間で今までサボつた分が取り返せるだあ？ナメるにもほどがあるぜ」

だが、その目はどこか嬉しそうだつた。

あ、暑い……ぐ、苦しい……

ブルペンは木陰になつてゐるがグラウンドを渡つてくる熱風が体中にまとわりつくようだ。

野球のユニフォームつて、なんていひ、一枚も重ね着しなきやなんないのよ

麗華はすでに、一年生を相手に百五十球投げていた。

昨夜、結局フイリップは現われなかつたが、そんなことはもうゼットでもよかつた。

と言つより、そちらの方はほとんど忘れてゐるくらいだつた。

今麗華はとにかく時間が惜しかつた。

寸刻を惜しんで野球漬けでいたかつたのである。

この投げ込みの後も、大鉄と遠藤にたのんで居残り練習の約束をしてあるのだった。

昨日の試合で大失敗をしてしまった牽制球とバント処理は言うに及ばず、挟殺プレー やサインプレーなど、やることは山ほどある。投手とはいえ、当然バッティングの練習もしなくてはならなかつた。

負けるもんですか……これ以上あのお父さんとお母さんを悲しませるなんてできないわ

麗華は本格的にスポーツに没頭するのはこれがはじめてだった。中学では手芸部に所属し、高校では「リラックマクラブ」というクマのぬいぐるみを作り続けるサークルに入っていたのである。

そんな麗華にとって、生まれてはじめて大きな目標に向かってハードなメニューを一つ一つ消化してゆく充実感は全てが新鮮であり、苦しいながらも楽しくもなつてきているのだった。

麗華は少しづつ変わってきていた。

一球一球投げるごとに増していく球速は、生身の人間としての成長を意味し、それにつれて流れる汗と溜まつてゆく疲労は生きている証を麗華に自覚させてくれるのだった。

なんだか素敵、生きてるって感じがするわ

たまたま人生の幕を自分で引いてしまったが、実際には成長期の少女であり、まだまだ人生をやり直すには充分な年齢なのである。

「ギーン！
ガギーン！」

向学大付属高校野球部第一練習場では、不気味な金属音が鳴り響いていた。

金属バットでボールを打つ快音ではない。

鉄と鉄がぶつかり合う、昔の鍛冶屋の作業音のような音である。

「足利、もうそれくらいにしておけ」

監督の勅使河原が呆れた顔で声をかける。

「あと十五本であります」

足利は肩で息をしながら、ちらりとそちらに顔を向けた。

顔からは汗が滝のように流れている。

手に持っているのはバットではない、ハンマーである。

土建業者が工事現場などで使う、先端が鉄でできているハンマーである。

打っているのも野球のボールではなく、陸上競技のハンマー投げで使うハンマーである。

つまりワイヤーのついた鉄球だった。

それを上から吊り下げる、ハンマーの先端で打つているのだ。

うふ、うふふふ……藤村君。僕のバッティングは更なる高みに達したぞ

足利は今日の試合で一本のホームランを打っていた。

その他の打席は全て敬遠されたのだ。

試合は十五対三で圧勝だった。

僕にとってこの一年がどれだけ長かったか

去年の準決勝、向学大付属は沢谷香高校に試合では勝ったが、足利は個人的に仁に完全に押さえ込まれたのだった。

三打数二三振、一内野フライ。

まさに完敗だつた。

仁のちやらんぽらんな性格は、足利のような真面目で思い込みの激しいタイプとは、実に相性がよかつたのである。

最終打席で打つたホームランは、仁に代わって出てきた三年生のリーフから打つたのだった。

練習不足の仁がスタミナ切れを起し、途中で交代したのである。だが、足利にとってそれは耐え難い屈辱であり、以来彼はこの打撃練習を毎日百本、日課としてきたのだった。

嬉しいぞ、藤村君。僕は君と対戦するためだけに、一年間この特訓を続けてきたんだ

足利にとって不幸なのは、去年の夏の大会以来、仁とは一度も対戦することができなかつたことだ。

去年の大会以来、沢谷香高校はどういうわけか ほとんど仁が原因なのだが 秋も春も向学大付属と対戦する前に負けてしまつており、足利は仁との遺恨を晴らすことができずに今日に至つているのだった。

「もう大会がはじまつてるんだから、ほびほびにしどけよ」

勅使河原は苦笑いしながら言つた。

「そんなアホな練習、ほとんど意味ないし」

そんな言葉が喉元まで出かかつたが、口には出さなかつた。

まあ、放つておいてもこいつは勝手に打つてくれるんだし、気のすむようにさせておくか……

勅使河原は自分の肩を叩きながらため息をついた。

「五回コールドで十五点だつてよ……」

「足利はホームラン一本だつて? 相変わらず景気がいいね、向学大は」

「大暴れだな」

八郎と牛若が首を振りながら呆れる。

「いよいよシード組が出てきたな」

大鉄はやや緊張した面持ちでつぶやいたが、その声は心なしかいつ
もより元気がなかつた。

「三日月山は一対ゼロだつてよ、鳥羽がノーヒットノーランだと」
八郎はわざわざ持つてきた朝刊を畠に見せた。

「相変わらず渋いね、あそこは」

牛若がいつものこととばかりに、それを一瞥して言つ。

「あと新聞には書いてねえけど、鳥羽のやつヒラードした味方に食つ
てかかるて、あわや退場寸前なんて一幕もあつたらしいぜ」

「味方と乱闘かよ」

牛若が肩をすくめる。

「これまた相変わらず殺氣立つてんね、やつ」いやん……で、その一
点つてのも鳥羽が打つたんだろ?」

「いや、玉川つてやつがサヨナラヒット打つたつて」

牛若が「えつ」と驚いて八郎に手を伸ばし新聞を受け取つた。

「誰だそいつ、一年生か?」

「いや、三年だよ」

大鉄が答えた。

「鳥羽が一墨打打つて、その玉川つてやつが代打で出てきてヒット
打つて還したんだつてさ」

「聞いたことねえぞ、そんなやついたつけ?」

八郎が首をかしげて言つ。

牛若が写真を見て「ああ……」と叫んだ。

「こいつ、あのマネージャーじゃね?」

「ああ、そう言えばそんなやついたな、太つた体でうらうらしている、
よく歩くアザラシみてえのが。あいつ、選手だつたのか」

「まあ、よそよそ。うちはうちだよ。とにかく明日の試合を勝た
なきやな」

大鉄はあえて声を励まして言つた。

「そりそり、なんたつてしがないノーシードだからね、うちの場合」

牛若がさりげなく皮肉るが、その目はどこか自信に満ちていた。

「まつたく、藤村の野郎が、もつと早く今みてえなやる氣を出してくればよ……」

八郎も舌打ちをするが、顔はにやけている。
むしろ笑いが止まらない、といったところらしく、その証拠にこんな風に話を続けるのだった。

「でもまあ、俺としちゃあ一試合でも多くできる方が楽しめるけどな」

「そうそう、終わりよければ全てよし、ってやつだね、それにノーシードから甲子園なんてのもカッコいいし……」

「甲子園？」

牛若が思わず口にした言葉を一人はもう一度復唱し、固まつて顔を見合わせた。

「……もしかして。ほんとに行けたりしてな……その、甲子園、とか」

「いいなあ、行きてえなあ、甲子園……」

二人はうつとりして、遠い目になるのだった。

大鉄は独り、暗い面持ちで一人をながめていた。

まづいな

それは大鉄も密かに恐れていたことだった。

仁（麗華）の指の血豆が潰れたのだ。

この一週間の仁は、明らかに投げすぎだった。
当然大鉄も黙つて見ていたわけではなかつた。

疲労や故障のことも含めて再三「やりすぎ」を注意したのだが、仁が頑として止めようとしなかつたのだ。

今日は試合の前日ということもあり、監督と大鉄の説得でさすがに仁も渋々ながら普通の調整に切り替えたのだが、一度潰れてしまつた血豆が明日までに固まることはないだろう。

やはりこの一週間の急な無理のツケがきたのである。

それにしても、と大鉄は改めて感心していた。

エースの存在感がチームにこれほど大きな影響を与えるとは。

この二二〇、沢谷香高校ナインの雰囲気は過去に例をみないほどのくなつてきていった。

当初懐疑的だったハ郎と牛若も、今ではすっかり仁の「やる気」を信用しているように見える。

まさかこのチームが、ここまでまとまつてくれるとは
だが、と大鉄は一方で冷静に考える。

いくら仁が頑張ったとはいえ、それは現実には、この、たったの一週間なのである。

今自分がうつかりやつの血豆の話などすれば、ハ郎も牛若も手のひらを返し、それ見たことかと仁を再びなじり、チームはたちまち數日前のあのギスギスした雰囲気に戻つてしまつに違いない。つまり、部員同士の信頼といつても、やつと芽が出てきたところなのである。

それを本物にするには、黙つて試合で結果を出すしかないのだ。
全てがもう一步なのである。

やつぱりみんなには黙つていよ
大鉄は独りため息をついた。

この男は、こととく苦労性でできているのだ。

覚醒 ハッピーバースデイ・トゥ・ヒロイン

「どおおおおいや あああー。」

「ナイスサーード」

「フツ……また捕つちまつたぜ

八郎は今日三度目のダイビングキャッチを決め、一ヒルに微笑むの
だった。

それにしても世間つてな冷てえもんだけ

八郎はスタンドを見回し苦笑いする。

一回戦での仁の醜態に皆呆れたのか、今日はあの田の三分の一も観
客は入っていなかつた。

だが。

「ノツてきたノツてきた。ノツきたぜ」

思つたとおり今日の彼は忙しい。

調子のいい時の仁ならば二振の山を築くはずだが、今日はよく打た
れる……というより打たせている。

やはりあの投げ込みの疲れがでているのだらつ。

当たり前えだぜ、あんなに無理すりや

だが、八郎にとつては楽しいことこの上ない。

やつぱ野球はこうでなくちや。

相変わらずふざけて女言葉なんか使いやがつて、やつの人間性
は今でも許せんが、野球に関しては、話は別だ。試合は手を抜かね
えゼ

「チエスツットオオオ！」

見ろ、この華麗なグラブさばき。

とにかく人間性は許せんが

一方牛若は。

「ふんっ！」

「ナイスショート」

フツ……笑止！ファインプレーなど素人好みのけれんですよ
体全体がグローブなどとは悠長な話だ。

ショートストップというポジションはファンブルすることすら許さ
れない。

ちょっともたついただけで内野安打になつてしまつのですよ。
見よ、この職人芸。

打球の方角を瞬時に、そして正確に見極め、しつかりと体の真
ん中で確実にグローブに収め、一瞬へ……しかし一も。新品のボール
は遠投になるほど変化するから、それも計算に入れて。遠投する
「ふんっ！」

基本の積み重ねこそ、美しいんです。まあ、うちの三遊間が鉄
壁の鬼門であること教えてあげましょう
そしてエンリケは。

試合したかったんだよなー田蒲学園。ここにチアガールは県内
一だぜ、ふふふ……つてまた内野ゴロ打たれやがったよ、めんどく
せえな、頼むからチアガールに集中させてくれっての、たまには一
十七人連続三振とかできねえのかよまったく。ぶつぶつ……
そもそもブラジル系の彼がなぜサッカーではなく野球を選んだか。
それは、サッカー場では広すぎてチアガールがよく見えないから、
という理由に他ならなかつた。

しかも距離が遠い上にサッカーというスポーツは忙しすぎて、じつ
くり鑑賞しているヒマがないのだ。

それに引き換え野球の、特にファーストのポジションは彼にとって
特等席なのである。

距離が近い上に下から見上げられるという余禄までついているのだ。

これだからファーストのポジションは誰にも渡せねえんだよ
一応遠藤も。

これじゃあ俺の出番はないかな、この試合

俺が君の近くに行けるのは、試合が負けそうな時だけ。

勝てそうな試合は、いつもいつもして君を遠くから見てているだけ。

大鉄

でも、負けたら、君とはもう一緒に野球ができないんだね。
最近麗華も君のことを完全に見直したみたいだ。
もしかして、気があるのかな。

俺は遠くから一人を見守っているしかないのかな……。
その大鉄は。

「ふふふ……」

マスクの下で頬が緩みっぱなしだった。

とんだ取り越し苦労だつたぜ

いつものように三振がとれない仁を誰も非難することなく、皆自分のプレーに集中している。

しかもこいつら確実にレベルが上がってる。
それも全員がかなりのレベルだ。

これもやつのお陰というのは言い過ぎかもしねんが……

皆、仁というモンスターに呑み込まれまいとあがき続けたお陰で、
一人ひとりが強くなっている。

そもそも、弱者同士の馴れ合いやなぐさめ合いをチームワークなどと称するのは、弱いチームの欺瞞きまんでしかないのだ。

強い「個」がお互いにしのぎを削り合つからこそ、チームはより強くなるのである。

沢谷香高校ナインは「」という内なる敵と戦い続けた結果、最早まごうかたなき強い「個」の集団……「戦闘集団」へと変貌を遂げていった。

強くなつたもんだ

まさかこんな逆説的な切磋琢磨の形があつたとは。

大鉄は笑いをこらえながら、感嘆のため息を吐き続けていた。
嬉しい誤算はそれだけではないのだ。

今日の仁である。

これ、カットボールじゃねえか？

大鉄は思わず唸るしかない。

カットボールとは、「曲がるストレート」である。

ストレートが甘いコースにきたと見せかけ、バットに当る直前にわずかに曲がる。

空振りよりも打ち損じを誘う変化球である。

今日の仁は、このボールで三振ではなく凡打の山を築いていた。こいつ、こんなに器用だったか？

大鉄が驚くのは今日の仁が、血豆が潰れて滑る指を逆に利用していることだった。

先にも書いたが硬式のボールというのは指先の微妙な加減で意外な変化をする。

指先が濡れていれば尚更であり、そのため、ルールでは故意に指先を濡らす 例えば指を舐めたりなど ことを禁じているが、出血の場合は不可抗力といえるのである。

アクシデントを逆に武器にしちまつとはな

本物の変化球投手というのは、雨の試合こそ真骨頂を見せるという。

雨に濡れてボールが滑るのを利用して、普段より余計にボールをグイグイと変化させてしまうのである。

だが、そのためにはそれなりのコントロールと冷静さが必要で、並みの投手であればその変化に自分がついて行けず、投球が乱れ、そのまま崩れてしまうものなのだ。

現に、この春の大会での仁は、雨で完全に自分を見失い大崩れしているのだ。

こいつも大幅に進歩してることか……それにしてもこのチームは強い。

鉄壁の守りと、つながる打線、そしてなにより精神的に見違えるほど成長した大エースの存在。

大鉄は感動のあまり叫びだしたい自分を抑えるのに精一杯だった。

一生こいつらと野球してみたいくらいだ、と本気で思うほどだった。

た。

最後に麗華は。

うふ、ちょっとずるいみたいだけど、いいよね

麗華は血のにじんだ人差し指を見ながらニヤリと笑った。

先週の一回戦で初球が「テッドボール」になつた理由を遠藤から聞いて、もしかしたらと思っていたらやはり期待が的中した。

ストレートを投げると、ボールが勝手に曲がってくれるのだ。それもほぼ速球の速さで。

だが、麗華がそれを武器として使いこなせるには、彼女が元々持っていた幾つかの能力が作用していた。

一つには、麗華は指先が器用なのだ。

生まれついての器用さにくわえ、中学時代の手芸部と高校でのリラックマクラブで鍛え抜かれた器用さは、野球部員の男子高校生などの比ではなかつたのだ。

そしてもう一つ、麗華には武器があった。

それは並外れた辛抱強さである。

ひたすら仁を想い続けて耐えてきた我慢強さ。

くる日もくる日もクマのぬいぐるみを作り続け、手芸と裁縫で鍛え抜かれた根気よさ。

女性特有の粘り強さといつてもいいが、麗華の場合その精神力が並みではないのだ。

ちょっとやそっとの制球の乱れで麗華の集中力が途切れることは、まずありえないのだ。

つまり、これがなにを意味するか。

すば抜けて器用な指先と不屈の精神を持つた麗華の魂が、百四十キロの速球を投げる仁の肉体に宿つたらどうなるか。

それは最早、普通の高校生が打ち崩せるなどというレベルではない。か、勝つた

「やつた、勝つた……勝つたのよ、あたしが……やつたああ

麗華はこぼれるような笑顔で両手を挙げた。

「ナイスピッチャー」

大鉄をはじめナインがいつせいにマウンドに駆け寄り、麗華をねぎらつた。

これも今までの沢高には見られなかつた光景である。

「よくやつたな」

と、麗華とハイタッチをしながら大鉄が笑う。

「とんでもない、みんながよく守つてくれたからよ、何度も危ない所を助けてもらつたわ」

と、麗華は笑顔で答える。

「いいつ、こんなにいいやつだつたつけ？」

八郎は麗華とハイタッチしながら首をかしげた。

試合は八対三。

麗華の成績は、奪三振六、被安打七、与四死球三 三失点のうち二点は、エンリケのよそ見によるエラー。

傍目には、ほとんど話題性のない平凡な試合である。

だが、一流投手としての条件を全て兼ね備えた「怪物」が、この予選の、誰も見向きもしないような凡戦で、非常な難産をチーム全員の助けを借りながら 一人足を引つぱる者もいたが 人知れずひつそりと産声をあげたことは、観客をはじめ誰一人、麗華自身さえもこの時には気づいていなかつたのである。

「跳べ……」

鳥羽の言葉には感情らしい抑揚がまるでこもっていない。パソコンの読み上げ音声のような口調でそれだけ言つと、さつさとその場から離れてしまつのだつた。

その顔も、能面のように無表情である。

「『』いつあんです」

鳥羽が離れるのを合図のように、一年生たちは一斉にジャンピングスクワットをはじめた。

「おい鳥羽」

鳥羽の行く手を主将の七篠が塞いで、その顔を見上げた。

「もう、いい加減にしてやれよ、大会中なんだぞ」

「だめだ」

鳥羽は七篠の田をまっすぐ見返すが、その田にも言葉にも気持ちはこもつておらず、犬の糞でもよけるようぐるりと七篠を回りこんで歩き出そうとした。

「おい鳥羽」

七篠は鳥羽の腕をつかんで引き止めようとする。

「俺の右腕に触んじゃねえ」

鳥羽は鬼のような形相で、七篠の手を払いのけてにらんだ。

「俺はあいつらと賭けをしてるんだよ、一年のスタメン、一人の凡打一回につき百回跳べってな……」

三日月山高校ではスタメンに一年生が一人いた、つまり一人が四打数ノーヒットならば一年生は全員八百回跳ぶことになる。

だが昨日の試合で一年生のスタメンは一人のうちの片方が一本だけヒットを打ち、また、一応二人とも一本ずつ送りバントを決めたので、今日は五百回で許されていた。

鬼の鳥羽も犠打の分は許してやるらしい。

「参考までに教えておくが、エラーは一つにつき五百回だ」

鳥羽はたつぱりと皮肉を込めて、仏頂面でそう言った。

七篠は返す言葉がない。

昨日の試合でエラーをしたのは三年生だったのだ。

「気持ちは解るが、味方の体力を削るようなまねはよせよ」

「気持ちが解る……だあ？」

鳥羽は鼻で嗤つてみせた。

「味方だってんなら三年も跳べよ。俺は失点一onisしつき十回跳ぶ約束してるぜ」

七篠は実直そうな眉を寄せて強く目を閉じ、鳥羽の言葉を呑み込むように何度も小さくうなずいてから、

「味方だよ」

と言つた。

「俺は味方だよ……俺だけじゃない。ここにいる全員がお前の味方なんだよ。でも、打てないものは打てないんだよ、三振やエラーをしたくて試合に出てるやつなんて一人もいないよ。一生懸命やつた結果なんだからしうがないだろ」

「タマは打つたぜ」

鳥羽が言つと、七篠は再び言葉に詰まつた。

「なんで打てたんだろうねー、今まで一度もフリーバッティングに混ぜてもらつてないタマちゃんが？」

鳥羽は充血した目を見開いてそう言つと、七篠の返事を待たずに歩き出した。

「ほんと、なんで打てたんだ……いや、なんであんなスイングができたんだ

昨日の試合。

「どうせ延長になるなら、こいつにも打たせてやつてください」

自分の次の打者に玉川を代打に送る約束を監督にさせて、鳥羽は打席に向かつたのである。

五番打者の代打である。

実のところ鳥羽本人も、やけくそだつた。

まさか玉川が打てるとも思つておらず、また、監督がいくらなんでもそこまで鳥羽の意見を呑んでくれるとも思つていなかつたのだ。だがどういふわけか監督は了承し、そして奇跡的に玉川は打つた。いや、鳥羽には奇跡には見えなかつた。

玉川のスイングは、当然のように打つべくして打つた一振りだつたのだ。

鳥羽は玉川の姿を田で探した。

まさか、今日も洗濯しているわけではあるまい。

フリー・バッティングのゲージの中にいる玉川を見つけ、鳥羽は歯軋りをするのだつた。

いまさら

玉川は今日、はじめてそこで打つことを許されたのだつた。

三年間野球部に在籍していく、今日がはじめてである。

昨日の試合のご褒美とでも言いたいのか。

それが鳥羽の神経を余計に逆なでするのだつた。

一生懸命だあ？笑わせるぜ、お前らの中の一人でもあいつくらいいバット振つたやつがいたかよ

玉川はこの三年間、ほとんど毎日素振りをしていた。

他の部員が帰つた後、全ての雑用を終えてから、一人グラウンドの隅で。

鳥羽が聞いた限りでは毎日一千回以上振つていたらしい。

鳥羽もそれに気づいたのは三年になつてからだつた。

それは偶然だつた。

監督に見つかぬよう、ベンチの陰に隠しておいた携帯電話をそのまま忘れてしまい、探しに戻つたところ、真つ暗なグラウンドの端で玉川が一心不乱にバットを振つていたのである。

鳥羽は呆れながらも、翌日から日の出でいる間くらいはつきあい、トスを上げてやつたり、時には本当に気が向いた時だけだが、バッティング投手をしてやつたりしてきたのである。

だが、玉川は一向に上達する気配すらなかった。

「おい、俺と代われ」

鳥羽は玉川に投げているピッチャーと交代した。

先ほどから十球ほど玉川のバッティングを見ていたが、ジャストミートが一つもないため、じれつくなつたのだ。

「真ん中投げるから、ちゃんと打てよ」

玉川は左打ちである。

彼の父親は野球が好きで、高校までレギュラーで活躍するほどだったらしい。

その父親が、玉川が子供のころに期待を込めてわざわざ左打ちを教えていたのは鳥羽もよく見ていた。

だが、はじめのころこそ熱心に指導していた父親も、一年二年とたち、まるで上達しない玉川に見切りをつけて、五年生になるころには相手をしてくれなくなつた。

才能のかけらもない玉川の「左打ち」は、子供のころはよく同級生たちにからかわれ、鳥羽はその全てを拳骨で沈黙させたのだが、実は当の鳥羽がそれを最も面白がつていてるくらいだったのだ。

そしてそれは、中学時代には無性な腹立たしさに変わり、高校生になつてからは痛々しく憐れにさえ思えているのだった。

金属バットが軋むような音を立て、まるでバントのようなゴロゴロが内野に転がつた。

スイングの速さだけなら足利よりすげえのにな

鳥羽は苦笑にする。

玉川は、身を削るほど繰り返した素振りの甲斐があつて、スイングのスピードだけは高校生離れしていた。

「なんだよタマ、昨日の振りと全然違うじゃねえか

鳥羽は一墨から見ていたのでよく分かる。

昨日はもっとこう、バットが生き物みてえに……

見ていた鳥羽も半信半疑である。

今でも信じられないが、ボールの方がバットに吸い付いて行くよう

なバッティング……それはプロでも一流のバッターのスイングだった。

「そんなこと言われたって、俺だって全然覚えてないんだよ」

玉川はそう言ってからも、ど真ん中のゆるいボールを凡打し続けた。三球。四球。五球……。空振りこそないが全てひどいドンヅマリだつた。

「このやうひ、もたもたしやがつて

鳥羽はだんだんイライラしてきた。

元々打てないならばともかく、現に昨日はできたではないか。

「昨日はできたじゃねえか、なんで一日たつたらできなくなつてんだよ？」

鳥羽は腹立ちまぎれにわざと玉川の太ももを田がけて、少し強めに投げてやつた。

鳥羽としては加減するつもりだったが、ボールが手から離れる瞬間、彼の気性が一瞬出てしまい、それは全力投球に近くなつてしまつた。

やばい強すぎると玉川もしねえだろ

「うわっ」

玉川は思わず悲鳴をあげたが、同時に、心地よい快音が糸を引いて、打球は美しいライナーを描き金網に当つた。

角度からいえばファールだつたが、玉川は体をゴムのようにぐにゅやりと捻りながら自分の体に向かつてくる鳥羽の速球を打つてしまつたのだ。

「なにすんだよシゲちゃん」

玉川は泣きそうな顔で鳥羽を見る。

にらむのではなく哀願するような目である。

「それだよ」

解つた、そういうことだつたのか……

鳥羽は満足そうに一人でうなずきながら投球を止め、その場を去つてしまふのだった。

県立国分寺球場では、今大会四度目の沢谷香高校校歌が流れていた。

「藤村投手については言わずもがなですが、とにかくこのチームは

攻・走・守のバランスが素晴らしいですね、私は春の大会もこのチームの試合を見ていますが、そのことと比べて、藤村投手をはじめメンバー全員が見違えるほど成長しています。例えば一回戦では藤村投手の乱調で非常に苦戦していましたが、春までのこのチームだったら、もしかしたらあのまま押し切られてしまつたかもしません」

「藤村投手もそこから尻上がりに調子を取り戻してきたようですが

……」

と、アナウンサーが言葉をつなぐ。

「なんと、一試合連続ノーヒットノーランです。明後日の準決勝では、これまた三試合連続ノーヒットノーランの記録を引っさげて勝ち上がつてきました鳥羽投手擁する三日月山高校と対戦するわけですが」

「非常に楽しみな投手戦が期待できますね」

麗華はチームメイトに揉みくちゃにされながら、本人が一番驚いた顔をしていた。

「あれ？ 今日もヒット打たれなかつたんだっけ」

「てんめえ、とぼけくさつて、このやろつ」

八郎が満面の笑顔で麗華の肩を叩く。

「お前えがみんな三振させちまつから、しきどりヒヤマでじょうがねえぜ」

「だつて、あたしだつていっぱいいっぱいなんだもん、ごめんなちやーい」

「けつこつ余裕あるじゃねえか、このやる、このやる」「ひやの

「痛い痛い、あははは痛いってば。キャッキャッ……」

「すでにマブダチかよ、こいつら、こつの間に？ハチローのやつ、

なんちゅうタンサイボー……」

牛若が目を丸くしながら呆れる。

麗華は二回戦と、この準々決勝で、合計三十七の三振を奪っていた。

試合の結果は。

二回戦 六対ゼロ。

準々決勝 五対ゼロ。

最早並みの高校生では、麗華と沢高ナインの勢いを止める』ことはできなかつた。

しかも二回戦の勝利者インタビューで麗華が、

「生きてるって、本当に素晴らしいことなんだと思いました。……」
と、思わず漏らした本音が、言葉の真意はともかく、その初々しさと爽やかさから大勢の人々の感動を呼び、麗華はすでに、単なる高校野球県予選という枠をはるかに超えた人気者になってしまったのである。

胡桃美琉久セカンドバトル（前書き）

前話の訂正です。

アナウンサーのセリフが「明日の準決勝」となっていますが、「後日」の間違えです。

訂正しておきます。

胡桃美琉久セカンドバトル

麗華が球場を出ると、色紙を持った小学生たちが駆け寄ってきて回りを囲む。

今や麗華はちょっととした町の人気者なのである。

「サインと、あの言葉を書いてください」

サインをねだる子供たちはほとんどはそう言つてきた。

麗華はこの何日かで「あの言葉」……生きているって素晴らしい

……という自分の言葉を写経のように何千回と書かされていた。

生きているって素晴らしい。

生きているって素晴らしい……。

ほんと、生きているって、こんなに素晴らしいなんて麗華は書いていて、ふと涙が出そうになることがあった。

生きているって素晴らしい。

姫野麗華として生きていたころには、当たり前すぎてほとんど気にもかけないでいたこの言葉が、今の麗華にはもう手の届かない、過去に誤つて捨ててしまつた宝物のように思えてくるのだった。

もしもう一度、やり直せたら

だが、いくら後悔してみたところで自分はもう手遅れなのである。後はこの子たちが自分のような過ちを犯さないように、この子たちの心に少しでもこの言葉が響いてくれたら。

それは懺悔と贖罪の行のようであった。

道ですれ違う人にはよく「生きているって素晴らしい、の人ですね?」などと声をかけられた。

中には間違えて「素晴らしい生きている人……」などと言う人もいた。

素晴らしい生きる……か

自分は今、他人から見て素晴らしい生きているのだろうか。

ついこの間、自殺したバカ娘だった自分が。

そういえばフイリップはあれ以来一度も現われないが、悪魔との交渉が難航しているのだろうか。

できればまだしばらくの間、このままの方がいいんだけど
「じゃ、ジンは芸能人じゃないのよ、あっち行けシッ、シッ」
うわっ、ミルク

どこからか間に割り込んできたのは胡桃美琉久だった。

「私がジンの恋人兼マネージャーなの、勝手にジンに近寄らないで」

美琉久はそう叫びながら、子供たちを手当たり次第に突き飛ばした。

中には小さな女の子も混ざっていて、転びそうになる子もいた。

「なにすんのよ、危ないじゃない」

麗華はあわてて女の子を抱きかかえ、美琉久をにらみつけた。

美琉久はあわてて「『めんなさい』と謝つたが、その時は完全にそっぽを向いている。

「だつて寂しかったんだもん。私のジンがすっかり人気者になっちゃつて、私も鼻が高いんだけど、なんだかどんどん私から離れて行つちゃうみたいで……」

大げさに泣き声をあげて、そつ言つて拗ねて見せた。

よく恥ずかしげもなく出てこれるわね、今ごろ

「あんた、ずっと姿見せなかつたけど、どこでなにしてたのよ」

顔なんて見たくもなかつたけど

すると美琉久は、思い出したように「『ほん、『ほん』と咳をしてみせ、みせ、みせ、

「ず、ずつと風邪ひいてたのよ、応援にきたかつたんだけどこられなかつたの」

「じゃあちようどよかつたわ」

麗華はできる限りの毒を、顔と言葉に込めて言い放った。

「もう、あたしに近寄つてこないで、あんたの性質の悪い病気を感^{たち}染されちゃかなわないわ」

「なんですか？」

美琉久は一瞬目を丸くしたかと思うと、思い切り顔をゆがめ、麗華をにじみつけた。

よくこんな表情^{かお}ができるものだと感心するほどに、ケダモノ丸出しが形相である。

「この子たちにも近寄らないでね」

「よくも私にそんなこと言えるわね」

美琉久の声が憎しみで震えている。

頬も氣味の悪い生き物のようにワナワナと震えていた。

「毎日毎日、高級食材のお弁当を作つてあげたのに」

「そんなのあんたが勝手に寄越したんじゃない、誰もくれなんて言つてないわ」

「憶えてらっしゃい、このクソ野郎、後できつと後悔するわよ」

美琉久はそう言い残すと、くるりと背を向け去つて行つた。

群がる子供たちを「どきなさいよ」と怒鳴りつけ、肩を怒らせ、がに股で歩く後ろ姿は、一速歩行をするゴリラのようである。

「まったく、ああも顔つきが変わるもんかね」

牛若がそれを見送りながら肩をすくめた。

「七人の子は生^なすとも女に心許すな、つてやつだね、恐い恐い」

「あいつ、とんでもないワルだよ」

遠藤もいつの間にか後ろにきていてささやく。

「俺、なんとなく判るんだけど、『氣をつけた方がいいよ、ああいう女』

女の心を持つた遠藤が言つとひどく説得力があつた。

「そうそう、はじめは処女の如く後は脱兎の如く、つてやつだね」

牛若がしたり顔でうなずいて見せた。

「あやああつ……

部屋に入るなり叫びそつになる麗華の口を、フィリップの手があわてて塞ぐ。

「フィリップ…… もん？ 本当にフィリップさんなの？」

麗華は恐怖に顔をひきつらせながら、やっと声をしぶり出して聞いた。

「よく分かつたね」

フィリップはそう言って微笑んだつもりらしいが、その顔は醜く歪むだけだった。

フィリップの顔は、前よりひどくなっていた。
ひどいなどと言うものではなかった。

右の眼球は飛び出してそのままぶらさがっていて、鼻は潰れ、顔は縦横にいくつも大きな裂け目が口を開けていて、しかも顔中にはまんべんなくひどい火傷の痕があり、髪の毛はほとんど全て焼けてしまったようで、わずかに残った根元の部分がこげて煤けていた。

「ほんとに大丈夫なの？ そんな大怪我して」

「少したてば治るよ」

フィリップは全く頼着していないかのように、手を振って見せた。

「ひ……久しぶり、ね」

麗華は緊張しながらそう言った。

ついにきたか、当たり前だけど

「いやいや、すまんすまん、すっかり話がこじれてしまつてね」

「それじゃあ、ジンの魂は返してもらったのね？」

できればもう少しだけ、あのメンバーと野球をしたかったけど

な

「いや、それが、だね」

とフィリップは言いにくそうに言葉を濁した。

「それが、まだなんだが…… だが、今度こそ心配は要らないよ。靈界では特別救助隊を編成することになつてね、今度は本物の戦士が一緒に行くことになつたからね」

「そ、そうなの……」

麗華はそう聞いて、少しほととしたような気持ちになるのだった。

「今日ここにきたのはその話ではないんだよ」

フィリップは少し、声に張りを持たせて続けた。

「これからはなにかと話が急になるだろうから、君にもいろいろと心の準備をしておいてもらおうと思つてね」

「心の、準備？」

「彼ら救助隊が首尾よく仁君の魂を取り返せたら、その後すぐにでも本人の肉体に戻さなければならないんだ、つまり、別の悪魔が臭いを嗅ぎつけてやつてくる前に。そのため君はこれから数日の間、いつ何時仁君に入れ代わつてもいいように、気持ちの整理をつけておいて欲しい」

「今度はそんな急な話になつたんだ」

麗華は複雑な気分でそう答えた。

「まあ、さすがに今日中というわけにはいかないだろうが、この数日の中には片付くだろう。だが、その入れ代わりのタイミングの約束まではできなくてね。君にとつてそれは突然やつてくることになるだろ？ つまりそれは君の食事中になるかも知れんし、野球の試合中かも知れん。その時、君の回りに誰もいなければいいんだが、もし近くに誰かがいたら極力その人たちに不信感を持たれないように円滑に行動してほしい、ということだ」

「数日の、うちに……突然に？」

つまり、みんなにさよならも言えないってこと……
確かに最初から分かりきっていたことではある。

仁の体に入つて、まだ一週間あまりだが、それは今までの麗華の人生の中で最も充実した日々だった。

友人もできた。

遠藤、八郎、牛若、エンリケ、そして……大鉄……。

今では皆かけがえのない仲間だった。

今までの十六年の人生と比べて、一度死んでからのこの一週間、この短い日々のなんと濃密なことであろうか。

しかし、それはあくまで仁の人生なのである。
つまりは借り物の人生でしかないのだ。

「ところで、君の方はすごいぶんと」活躍のようだが
「うん、楽しかったわ……生きててこんなに楽しかったのってはじめてだつた」

麗華は遠い目をしながらそう答えた。

この一週間の思い出に浸る一方で、仁の両親にも、野球部の友人た
ちにも、さよならの一言も言えない自分の立場が、無性に寂しく思
えてくるのだつた。

「やっぱりそう思ったかね？」

フィリップは声を弾ませてそう聞いてきた。

「実は靈界でも君への特例措置が検討されていてね、それが今日の
一いつ日の報告だ」

「特例って？」

「特別に君の転生の許可がおりそうなんだよ。 同年代の人へのね
「本当？」

麗華は目を輝かせた。

「君の予想外の頑張りに対しても靈界の評価もとても高くてね、そ
れに、ここのこところ君は自分の人生についてずいぶんと考え直した
みたいだからね。そこで、転生先の家庭環境その他、君の希望など
を聞きながら、できるだけ君の条件に合いつつな死者を選んで生ま
れ変わつてもらおうと思つただが。 やっぱり次も女の子がいいかな
？」

麗華は少し興奮しながら「そうね」と考え込んだ。

「男の子も悪くないけど……」

そこまで言つてから急に顔を真つ赤にして、

「やっぱり女の子がいいかな」

と言つたが、また慌てて「いや、でもやっぱり……」と首を振つた。
何故か目の前を大鉄の顔が横切つたような気がしたのだ。

なんであいつの顔がちらつくのよ

だがフィリップがその後に言つた言葉は麗華を愕然とさせたのだつ
た。

「ただし、転生をした後に今の君の記憶はなくなるがね」

「そ、そんな……」

「いや、これは当たり前だよ、前世や私の記憶を残した者に人間界をつらうつらされては、なにかと混乱をきたすだけだからね、転生した後はその相手の人格になつて、一生を過ぐしてもううわけだね、これが」

「ず、ずいぶんと冷たいのね」

麗華はひどくがっかりして、やつとそれだけ言つた。

「これでも、自殺をした者に対する前例のない破格の厚遇だよ」

「それを言われちやうと、返す言葉もないんだけど」

「まあ、その後の自分の運命は自分で切り開くつてことだね、カーマは気まぐれつてことで……」

フィリップはそう言い残すと、窓から射し込む真っ赤な西日の中に溶けていった。

麗華はしばらくその夕日の中で呆然と自分の影をながめていた。やっぱり自分は『の影武者、所詮この影のよつた存在にすぎなかつたのか。

どこからか町工場の機械が、忙しげなリズムを刻む音が聞こえてくる。

その音にひられて、自分の心拍も早くなつていくよつた気がした。だが、この心臓も結局は『のものなのだ。

そして心臓から送り出される温かい血も、血管も、骨も筋肉も……。

この体を出たら、そこまで全てが終わる。

そう思つと涙が止まらなくなつた。

そしてこのなん日かの間、心中でなんども浮かんでは自ら打ち消し続けてきた甘い葛藤がはつきりと一つの想いとして形になるのだった。

麗華は最早、それを素直に受け入れるしかなかつた。

大鉄……とうとうよならも言えないのね

生まれ変わり、記憶が消された後で大鉄と再び出逢うなど、奇跡で

も起らぬ限り、ありえないのだ。

荒ぶる精密機械

「まともにやれば、それほど恐いチームといつわけでもなかつたんだけどな、ここは」

マウンドで準備投球をする鳥羽を見ながら、大鉄が独り言のようにつぶやいた。

「そうなの？」

麗華は隣で喋る大鉄にちょっとビドキドキしながら聞いた。

「だつて、すゞい迫力じゃん、あの大きな体」

マウンド上で早くも闘志むき出しの鳥羽は、やはり圧巻である。

それに守りについている他のメンバーもどこかピリピリしていた。

「そう、確かに鳥羽はすごい、でも、すゞいのはやつだけだつたんだ」

「ここは鳥羽一人で勝つしかないようなチームだつたのよ」

今度は遠藤が反対側に立つて、そう言つてきた。

この何日かの遠藤は、麗華と大鉄が近づくのをどこか気にしているようなところがあつた。

「鳥羽が投げて相手を完封して、あとは鳥羽が打つて、それにバントや相手のエラー やフォアボールとかをからめて、とにかく一点二点をとつてそれを守りきる、っていうのが三田畠山の勝ちパターンだつたの」

「逆に言うなら、こちらが一点以上とつてしまえば、ほぼ九割がた勝てるってことさ。まあ、いずれにしても、向学大みたいな爆発的な恐さはなかつた……つづかお前だつてよく知つてゐるだろうが？」

大鉄は驚いた顔で麗華の目を覗き込んだ。

「え？ そ、そうだけど……」

麗華は慌てたが、大鉄はほとんど気にかけずため息をつきながら続けた。

「ところがこの大会に入つてから、玉川という伏兵が出てきたつて

わけを」

「オーダーに入つてないつことは、今日も代打で出でてくるのかしら?」

「この試合の鍵はそこだな、どうにかして玉川を代打に出させない、つまり、鳥羽を完全に押さえ込むことができるかどうかだな」

「そうなのよね」

「ところで遠藤……」

大鉄は堪りかねたように麗華の背中越しに遠藤に話しかけた。

「なんでお前まで女言葉なんだ、今日は?」

遠藤は「あら?」と笑った。

「な、なんだか仁の言葉がうつづけちやつたみたい、あははは……」

大鉄は「ふーん」と遠藤を横目で見ながら離れて行った。

それを見送りながら、肩を落としてうなだれる遠藤の姿が麗華には痛々しかつた。

彼はここへきて、さりげなく大鉄にアピールしはじめたのだ。

それも、彼なりに精一杯、自分の存在を主張している。

なんだかかわいそうみたいだけど

同情というよりは奇妙な連帯感を麗華は感じていた。

遠藤の想いが成就しなければ良いなどとは思わないが、大鉄の様子から見てその可能性はほとんどゼロと思つてよいだろ?。

だが、一方で自分も境遇は遠藤とほとんど大差ないのだ。

今の仁の体のまま想いを告げるわけにもいかないだろうし、女の子に転生したところで記憶を消されでは一度と大鉄に再会することもないに違いない。

その気になればずっとそのままにいらっしゃるとこつ烁では、まだ遠藤の方が幸せか。

「でも、どうやってこんなペッシュチャーカードもどるの?」

麗華は気持ちを切り替えて遠藤に尋ねてみた。

「鳥羽って、あの物腰からは想像できないけど、実は筋金入りの変化球投手なのよ」

「そうみたいね」

それは今までの三日町山の試合を見ていて麗華にも理解できた。

身長百九十三センチの高さから、長いリーチで投げ下ろす球はただでさえタイミングがとりにくいのだが、それに加え、あの野獣のような人となりからは想像もできない、精密機械のようなコントロールと駆け引きで、あだなは「コンピュータを搭載したメカザウルス」と呼ばれていた。

ただし、そのやり口のえげつなさは鳥羽の激しい気性とひねくれた性格丸出しだった。

「彼の生命線は、横の揺さぶりなの」

つまり内角の、打者の体にぶつかるぎりぎりのシューートで恐怖心を与えて、次に打者の目から最も遠い外角低めの沈むスライダーで打ち取る。

いわゆる対角線投法、別名ケンカ投法である。

特にシューートは一級品で、右打者の内角のストライクゾーンをぎりぎりにかすめた直後に、とんでもない角度でバッターに向かって咬みつくように曲がっていく。

コースがストライクであるため、それは危険球になることはなく、更にすごいのは、そんな際どいボールを多投するくせに、鳥羽はこの三試合の死球がゼロなのである。

「ところが……」

と、遠藤は続けた。

「うちには内角攻めを恐がらないバッターが三人もいるのよ」

「ハチローと、大鉄と、エンリケ……」

「そう、その上そのハチローとトップバッターの牛若は左打ちだし遠藤がそこまで言ったところで、マウンドの鳥羽が『おい、お前ら』とこちらに向かつて叫んだ。

「この一年、俺は臥薪引水の思いだつたが、今日は絶対勝たせてもうつぜ」

「ガシンインスイ、つてなに?」

麗華は混乱して遠藤に聞いた。

「臥薪嘗胆つて言いたかったんじゃない？鳥羽つていつもあんな感じなの」

遠藤はほとんど氣にもかけない様子で、鳥羽を見ながら答えた。

「我田引水と混ざっちゃったのね……」

「田にもの言わせてやつから指洗つて待つてやがれ」

鳥羽は上機嫌でさりに言い放つた。

「まともに聞かない方がいいわよ、試合に集中できなくなるから」

ジンが試合の後までバカにするわけだわ

牛若がいれば細かくツツコんでくれそつだが、今彼は打席に入るとこりである。

試合はやや緊張感を削がれた感じで、しかも鳥羽のペースではじまつてしまつのだつた。

「おらあつー！」

「速い……」

麗華は思わず声をあげた。

初球はアウトコース低めいっぱいに、鋭い音をたててキャッチャーミットに納まつた。

「近くで見るとストレートも思つたよりずっと速いわね」

「スピードガンの表示だと百三十五キロ前後らしいんだけど、あの身長とリーチで十キロくらいは速く見えるわね」

しかもフォームもグニヤグニヤギクシャクしていくいかにもタイミングがとつにくそうである。

二球目。

牛若の動きも早い。

ビデオの早回しのような身のこなしで、バントの構えに変化し、それが対照的な、スローモーションのようなゆるい「口を一墨線に転がした。

みえみえの作戦ではある。

だが、試合開始直後の一墨手は、決して意表を衝かれたわけでもな

いのに、動きが鈍い。

牛若の足は速い。

慌てて一塁のカバーに入る鳥羽と牛若の、競走のよつになった。

鳥羽は一瞬狼狽した顔になつたが、からうじてアウトにした。

昨日の作戦どおりね

昨日のミーティングで確認した作戦だった。

決して鳥羽を気分よく投げさせないこと。

ピッチャヤーが気分よく投げるパターンは一種類ある。

一つは空振りの三振をバタバタと獲る場合。

そしてもう一つは、バッターを自分の思うとおりの変化球で「打たせる」場合だ。

鳥羽の場合はあきらかに後者で、打者をシューートで仰け反らせ、外角のスライダーを引っかけさせて打ち取ることに独り一人マリとほくそ笑むタイプである。

つまり、同じアウトになるにしても、鳥羽の術にはまって打ち取られないことを徹底させるのである。

現に鳥羽は先頭打者を仕留めた割には不機嫌な顔になつていた。そして。

ずいぶんと解りやすい性格ね

この神経質で感情の起伏の激しい性格が、鳥羽の最大の弱点であつた。

続く二番の花川口も一塁線ヘバンント。

結果、牛若よりも余裕を持つてアウトになつたが、打者一人分、ファーストのカバーに全力疾走させられた鳥羽は露骨に不機嫌な顔になつた。

応援スタンドでは、しばしのため息の後「ハチロー・コール」の合唱が起こりはじめた。

ここまで打率四割を超える活躍と、ファイトあふれるプレーで、この軽薄な頑固者は意外と人気があるので。

鳥羽の顔が緊張に引きしまる。

去年の大会では、一〇のハチローと大鉄に打たれて負けているのである。

だが。

「あつ……」

今度は完全に鳥羽も内野手も一瞬呆然とした。

八郎もバントをしたのだ。

しかも、今度はピッチャーの足下、やや三塁寄りにピッシュショット地を這うような強めのコロを転がしたのである。

バントの構えを見て、ファーストのカバーに一步足を踏み出していた鳥羽は一瞬逆を衝かれた。

鳥羽が慌てて長い腕を伸ばすが、バットに当る寸前に強く押し返されたボールは、その横をすり抜け更に転がり続けて行く。

ショートが慌てて前進し、ファーストに投げるが、それがハーフバウンドになり、タイミング的には微妙だつたが一塁手はそれをミットに当てて落としてしまつたのだった。

鳥羽はスコアボードに点つた「Hマーク」のランプを確認し、一度安堵の表情を浮かべてから田をつり上げ、

「てめえ、そのくれえ捕れよバカヤロウ」

と、一塁手をにらみつけて毒づいた。

このチームのもう一つの弱点はこれだった。

三田町山ナインは、全員がどこか鳥羽の顔色を伺い、おどおどしているところがあるのであるのだ。

ツーアウトランナー一塁。

チャンスというほどではないが、お祭男の序盤の出塁にベンチもスタンドも、いやが上にも盛り上がるのだった。

そして迎えるバッターは四番、大江戸大鉄。

ここまで打率は五割を超え、ホームランも一本打っている。足利ほどの派手さはないが、最も頼りになる男である。

「やつたあ」

いきなり初球がサードの頭を越えたが、それはすぐにため息に変わ

つて行つた。

打球は三塁手の頭を超えた後、急速にきてファールグラウンドに落ちたのである。

「シューートを無理やり引っ張ったから、バットの根っこだったね」遠藤が苦笑いしながら言つた。

詰まつてファールになつたとはいえ、充分なヒット製の当たりにベンチは活氣づく。

シューートが曲がる前に打つ

大鉄は集中力を切らさぬために、再びこの言葉を心の中で繰り返していた。

ベースの角をよぎつて曲がるほどの鋭いシューートを逆手に取る。理屈は簡単だが、これは誰にでもできることではなかつた。大鉄のスイングスピードを持つとしても、今のようなファールになる確立の方が高いのだ。

だが、次のバッター、五番エンリケはどういうわけかこの大会でノーヒットの大ブレークなのだ。

玉川の存在も気になるし、なんとしても、ここで打つておかなければ

第二球もシューート。

大鉄はきつぎりまで脇を締め、体を軸にするように小さくバットを振つた。

ボールは再び快音を響かせ、サーブの横を襲つた。

当たりこそ鋭いが、今度は完全なファールである。

当たりはどうあれ、結果大鉄はソーナッシングと追い込まれた。

だが、鳥羽も精神的には辛いはずだ

ピッチャーにとって、得意なボールをコシコシヒートされるのは、気分のいいものではないのだ。

外角に。スライダーかストレート……

ボールにヤマを張る場合、球種かコースのどちらかを予想するのが基本である。

大鉄はコースにヤマを張つた。

次も内角のショートならば、咄嗟にカットするくらいはできそうだ。だが。

「な、なんだ？」

それは大鉄には一瞬、明らかに失投に見えた。

いや、失投というより投げそこないにしか見えなかつた。

ボールが鳥羽の頭上より高く、すっぽ抜けたように舞い上がつたのだ。

あ、あ、あ……

だが、ボールは不自然な弧を描き、落ちるといつよりは下に向かつて急激に曲がり、大鉄の頭上から膝元まで一気に急降下して、キャッチヤーミットに入るのだった。

「ストライクスリー！」

球審が一呼吸おいてから確かめるように宣告した。

ド、ドロップつてやつか

それはいわゆる「縦に曲がるカーブ」だった。

「どうだ大江戸、俺さまの新魔球は？」

鳥羽がマウンド上でゲタゲタと笑つた。

「魔球つて、ただの落ちるカーブじやねえか……」

ベンチで牛若がいまいましげにつぶやいた。

「名づけて大リーグボール四号、ナイアガラ……」

だが、鳥羽はそこまで言つて固まつてしまつのだった。

「魔球ナイアガラ……なんか中途半端ね」

「いや、続きを忘れたんじゃねえか？」

「……エアーズロック！」

鳥羽はどこか切羽詰つた感じで両方の眉を思い切りつり上げて笑つた。

「どうだ、声も出まい」

「ぐうの音も出ねえよ……」

牛若はため息と一緒に吐き捨てた。

「ナイアガラ……エアーズロック?」

「……日本語にすると、富士山琵琶湖、みたいな感じかね。つづ
うか、頭に浮かんだ単語をただつなぎ合わせただけじゃね? つづ
か、アメリカなのかカナダなのかオーストラリアなのか、一体どこ
のなんなんだよ?」

「あいつの言つことは気にしない方がいいわよ」

牛若の独壇場とも言つべきツッコミを遠藤が冷静に締めくくつた。

「お前の女言葉も気になるよ……」

脳やかなベンチをよそに、大鉄は顔にこそ出さないが独り背中に
冷たい汗をかいていた。

これは、打てない
縦に曲がるカーブ。

使い古された変化球だが、鳥羽のような長身の投手が投げると、ま
さにナイアガラの滝のような落差になる。
実に効果的な変化球だった。

「シッポまくつておとといきやがれ」

鳥羽はそう言い捨て、肩で風を切つてベンチへ下がつて行つた。

恐るべし伝家の宝刀ナイアガラエアーズロック。

恐るべし鳥羽語録。

毎月のアカウント（記録表）

前回の訂正があつます。
活動報告に詳しへ書いておきましたので、そちらを読んでください。

抱えるアザラシ

たすがに体がだるいわ

麗華は準備投球をしながら、軽く体を捻つてみる。

予選の日程で準々決勝からは中一日、間があいたが、ここへきて一回戦の後の、あの無謀ともいえる投げ込みと、一試合毎に蓄積された疲労が、まるで機械が錆びついていくように麗華の体にまとわりついているのだった。

「マッサージしてやろうか?」

昨日大鉄がそう言つてきただが、麗華は断わった。

いくら仁の体とはいえ大鉄に全身を触られるのが恥ずかしかったのだ。

だがそれで、せっかく大鉄と一人きりでゆっくり話せそうな機会まで失つてしまつたことが、麗華には残念だった。

大鉄とは一度、試合後に一緒に食事をしたが、それは一度とも満腹亭のカウンターに並んで慌しくラーメンをすすつただけで、話題は野球のことばかりだった。

一度くらいはゆっくりコーヒーでも飲みながら、野球以外の話もしてみたかったが、それは到底かないそうになかった。

今度フイリップが現われた時は、ほぼ間違いなく「仁」を連れてくるだろう。

昨夜は結局こなかつた。

それでは今日くるのだろうか。

この試合中に入るのだろうか。

いや、もしかしたら今、この瞬間にくるかも知れない。止むを得ない事情とはいえ、ひどい話だと麗華は思う。

自分の気持ちなど全く無視されているのだ。

もう、大鉄には全部本当のことを言っちゃおうかな

昨日からふとそんな衝動に駆られることが何度もあったが、それは

大鉄にとつて迷惑以外のなにものでもないのだ。

今日と明日の試合で甲子園に出られるかどうかといつ時に、エースの仁がまたわけのわからないうことを言ひ出せば、彼の余計な心配事が増えるだけだった。

「今までいろいろどじめんね」

なにも知らずにマウンドに駆け寄ってきた大鉄に麗華はとにかくそう言つてみた。

考えてみればはじめて「」として会つたあの時、つい口から出てしまつたあの言葉が、この素敵な野球バカをどれだけ傷つけたことだろうか。

大鉄は「えつ」と一瞬戸惑つた直後、一度ひどく悲しげな目になつたが、すぐに、

「今は試合に集中しろ」

と、言い放つた。

その田と言葉のあまりのアンバランスに、麗華は胸を絞めつけられ、そして失笑してしまいそうにさえなるのだった。

この大根役者は、あふれるほどのいたわりと優しさと自己否定を、その目で饒舌に語つているくせに、口ではまるで真逆のセリフを言葉少なに語つて、この期に及んでなお悪役を演じているのだ。男というのは変な生き物だと、麗華はつくづく思う。

麗華は噴き出しそうに笑いを堪えながら「うん」とだけ返事を返すのだった。

大鉄はそっけないくらいにぶつかりぼつに麗華に背中を向けて、ホームへもどりうとした。

野球選手つて、かつこいい……

麗華はなんだか堪らない気分になつて、気づいた時にはその背中を膝で蹴つていったのだった。

「痛つてえな、なにすんだよ」

大鉄はどこか嬉しそうに麗華をにらみつけた。彼も苦しんでいたのだ。

いつもマウンドにくる時には笑顔を絶やさないが、マスクの下ではどんな顔をしているのだろう。

こん畜生、絶対甲子園行けよ

大鉄の背番号2がにじんで見え、麗華は小さく咳き込んだ。

自分がこの世で、最も好きになった男。

手をつなぐことすらできない男。

この万人に誇れるヘタクソな千両役者の、子供じみた大きな夢が今は自分の右肩にかかっているのだ。

負けるもんか……絶対

麗華は渾身の力を込めて、第一球を投げた。

試合は大かたの予想通り、投手戦となつた。

鳥羽は大胆にもクリーンナップ以外にはセカンドヒートとショートを大幅に前進させるという露骨なバントシフトをとらせ、ヒットティングにきた相手には例の「落ちるカーブ」（ナイアガラエアーズロック）を多投し。一方麗華は一巡目の打者のほとんどを三振に仕留め。お互い一步も譲らず、それぞれ打者一巡目をノーヒットに抑えたのである。

だが、この三振ショーが麗華にとっては返つて仇となつた。
無意識のうちに力んで全力で投げ続けた疲れが五回の裏になつてじわじわと効いてきたのである。

五回裏先頭打者、二巡目の四番鳥羽。

麗華としてはこれまでと同じように投げているつもりの球が、二球とも高めに浮いてしまつたのだ。

カウントはツーボール・ノーストライク。

溜まつた疲労と、意識のしそうによる力みがボールを浮かせたのだった。

ボールを握る手が無意識に深くなりすぎていることを危惧した大鉄がスライダーを要求したが、鳥羽はこれをねらつていた。

長いリーチで振りぬかれた打球はセカンドの頭上を高々と超え、右

中間の真ん中を深々と破りフェンス際まで飛んだ。

スタンディングダブル。

それはスライディングダブル。
二塁打だった。

つまりフェンス際まで転がつて行つた打球からすれば、三塁を窺つてもよさそうな当たりを、あえて二塁打に止めておくところに次の打者に対する絶対的な信頼が表れていた。

すでに三日月山の応援スタンンドはさざ波のように湧き立つている。

「出でくるぞ、あいつが……」

そんな声がグラウンドまで降ってきた。

三日月山のベンチが動く。

監督は最早五番打者への代打に、なんのためらいもないようだつた。

場内アナウンスが玉川の代打を告げると、三日月山の応援スタンドでは嵐のよくな太鼓の連打が吹き荒れた。

とうとう最も恐れていた事態を迎ってしまった。

「抱えろ！アザラシ」

そう書かれた横断幕が待ちかねたように広げられた。

勝てる、これで勝てる

鳥羽は唇の端を歪めて笑つた。

今年は違う、去年までのうちとはまるで違うんだよ

とうとう現われてくれたのだ、喉から手が出るほど欲しかつた、待望のポイントゲッターが。

まさか、こんな身近にいやがつたとは。

監督が見損なつていたのもむりはねえ。

毎日一緒に練習してた俺でさえ気づかなかつたんだからな。

みんな俺が強引にベンチ入りを薦めたと思つてやがるんだろ

うが、監督がそんなに甘いわけねえだろ

鳥羽は单刀直入に玉川の手を見せて頬み込んでみたのだった。

だめで元々と思っていたが、意外にも監督は「わかった」とだけ

言つてうなずいたのである。

知つていたのだ。玉川が一人、練習していることを。

だが、それだけでベンチ入りさせるまではできなかつたのだ。

俺だつて、まさかタマの野郎がほんとに打つとは思つてなかつたもんな……

グラウンドに雨のような拍手が降つてきた。

三日月山の応援席は、総立ちである。

玉川がベンチから出でてきたのだ。

のそのそと這い出るように。

小柄でなで肩でぶよぶよの体。

およそユニフォームの似合わない不恰好なこの男こそ、三日月山高校にとって、今大会彗星のように現われた新しいスターだつた。その太い首に、すでに汗が光つているのを大鉄はじつと観察していた。

やはり裏でずっと素振りをしていたのか

試合開始直後から大鉄は三日月山ベンチに玉川の姿を探していただけ、今まで一度も見つけられなかつたのだ。

野球部員の中にあつては目立つ体型である。

三年間、三日月山にこの男がいることは知つていたが、打席に立つのを見たことは一度もなかつた。

ところが、最後の、この大会になつて突然現われ三打数三安打。三日月山の数少ないチャンスに代打で出てきて必ずヒットを打つてきた。

チャンスに強い、ということか

だが三打席だけではなんとも言えなかつた。

トーナメントブロックの都合で、三日月山の試合は一度もテレビ中継されていなかつたため、大鉄はこの玉川が打つところを一度も見たことがなかつたのである。

油断してた、まさかこれほど警戒するような打者だったとは

だが、次の瞬間、大鉄は愕然とした。

ネクストバッターズサークルに転がっていたマスコットバットに足をとられ、玉川がひっくり返ったのである。

スタンドがどつと笑いに包まれた。

もしかして、地に足が着いてないのか……？

それはコントのような派手な大転倒だった。

足を乗せたマスコットバットが転がり、玉川は背中から地面に落下したのだった。

「す、すいません、すいません……」

玉川のような男の習性ともいつべきか、彼には反射的に周囲に謝る癖がついていた。

実際にはなにが起きたのか、自分でも分かっていない。
もしかしたら、転んだことさえ分かつていなかかも知れないほど、

この男はアガつていた。

か、監督、無理ですよ、代打の代打を……

「やつさと行ってこい」

泣きつ面でなん度も振り返る玉川に業を煮やし、監督の北条が思わず怒鳴りつけた。

「すいません、すいません」

ひどいよ、みんな無理なの分かってて……

「君……早くバッター poccksに入りなさい」

審判にまで急かされ玉川は反射的に「すいません」と謝ったが、
彼はもうその相手が誰かも解つてはいなかつた。

誰かになにかを言われたので、とりあえず「すいません」と反応しただけなのだ。

バットが震えるのか？

玉川が構えたバットが小刻みにヘルメットにぶつかって音を立てている。

しかもまだ一度もバットを振っていないにも関わらず、すでに緊張のためか息遣いまで荒くなつていた。

決して油断するわけじゃないが、恐らく普通の代打に対するよ
うなやり方でいいだろ？

つまり、打者に考えるすきを与えないくらいの早いテンポで、三球
続けてストライクを投げる、最も単純だが効果的な攻略法である。
代打の打者というのは、ピッチャーの投げる球に目が慣れているは
ずもなく、試合のリズムにも乗れていなくていいものだ。

つまり、落ち着いてしまった前に「気がついたらストライクを二つ取
られていた」という形に持つて行つてしまえばよいのである。

第一球。

大鉄はストレートを要求した。

ナイスボールだ

だが、鋭い金属音が聞こえ、ボールは大鉄のミットには入らなかっ
た。

慌ててマスクを飛ばして目で追つたが、すでにバッケネットに当つ
ていた。

当てた……真っ青な顔で震えてたくせに、仁の速球に、一球目
から……いや、そんなことより……

見ると当の玉川は勢い余つて尻餅をついている。

相変わらず怯えたような顔で、肩で息をしてむせていた。

大鉄はタイムをとつてマウンドに駆けた。

「あいつ、スイングだけはすげえぞ」

「聞こえたぜ、サードまでブーンって音が」

八郎も興奮しながら話に入ってきた。

「ありや高校生の振りじやねえよ、いつたいどんな練習したらあ
んな音が出るんだよ」

「三試合連続ヒーローってのは、まぐれじゃないってことか

「どうしよう……？」

「あのスイングだとお前の速球でもまぐれ当たりつてことも充分
考えられるだろう、当れば飛びそうだしな……代打で目が慣れてな
いから変化球だったらついてこれないだろ？、低めのきわどいとこ

ろを攻めよう。狙い球を絞らせなによつてんぱよへじこむ

「わかつたわ……」

代打で目が慣れてないから変化球を低めに集めり……大方そ
んなところだろうな

セカンドベースの上で鳥羽はせせら睡つた。

よかつたじやねえかタマ、あいつらも今までのやつらと同じ
ようにお前の見た目に騙されてくれて。警戒されて敬遠なんかされ
ちゃあ泣くに泣けねえもんな

先ず内角低めいっぱいにスライダー。

外れてボールになつてもよし、手を出してくれば儲けもの。
どの道あの出つ張つた腹が邪魔でイン・ローは見えねえだらうし、
バットを振るうにも腰が回らねえだらう。

俺にはバレバレで笑つちまづくらいだが……でもな……

金属製の打楽器を鳴らしたような美しい快音が糸を引き、打球は
低い弾道のアーチを描いて、ライト線へ飛んだ。

観客は一瞬期待と不安を込めて沈黙するが、それはすぐにため息
に変わつた。

わざかに切れたのだ。

だがそれはフェンスにダイレクトで当るほどの大飛球だつた。

やつに小細工は通用しねえのさ

横の変化に、ああまで完璧に対応されて、大江戸もさぞ頭が痛い
ことだらうな。

ストレートにバットが当つた時は、半分はまぐれだと思つていた
だらうが、これでまぐれじやないことを思い知らされたわけだ。

こうなるともう、残りは縦の変化しかねえ。

今度は外角低めにボールになるフォークで、縦の変化に対する反
応を見る。

だが……

「うおおおおん……」

アザラシが咆えた。

奇跡の異能打者

咆えたといつも悲鳴をあげたように麗華には聞こえた。追いつめられた獣が少しでも早くその苦痛を逃れたくて呻いた悲痛な慟哭のようだった。

ゴギン！

ボールの芯を外したバットは痛々しいほど鈍い音を球場に響かせた。

打ち取った……

麗華は「センター」と声をかけ、腰が砕けて尻餅をつく玉川を田の端に見ながら、サークルのカバーに走った。

タツチアップがくる

だが、ボールは落ちてこない。

青い空にふわふわと舞い上がったまま、まるで白い小鳥のよつむしろ加速していくようにさえ見える。

まさか……まさか

観客が一瞬静まり返る。

皆固唾を呑んで、ボールの行方を注視している。

やっとボールが落ちてきた。

だがその下のセンター花川口は構えていない。

背番号8をこちらに向けて、呆然とボールを見送っていた。

そ、そんな……

ボールはバックスクリーンの手前で大きく跳ね上がった。

三日月山の応援席からは歓喜の雄叫びがあがつた。

沢高の応援席からさえ感動のため息がもれた。

この最高に不様なホームランは敵味方を超えて、見ている者に感動を与えるほどにドラマチックだったのである。

当つた？……バットに当つたのか

玉川は打球がフェンスを越えたころ、やっと我に返つていた。

走らなきや

慌てて、ゴム鞠のように跳ね起きると、太った体を本物のアザラシのようにだぶだぶとくねらせながら、一塁まで全力疾走した。まだ足の震えが止まらない、つんのめって体が一回転するほど派手に転んだ。

まずい、アウトになる

文字通り這うように一塁ベースにたどり着いても、まだボールはきていたなかつた。

あれ？ もしかして、またファールだったのかな？

「さつさと走れよデブ、ホームランだよ」

ベースを踏んできょろきょろしている玉川に鳥羽が堪りかねて怒鳴りつけた。

「え？ ホームラン……」この俺が？

「いいから走れ、もたもたすんじゃねえ」

「あわわ……俺が、ホームランだなんて、ウソだ」

だがその時になつてはじめて球場を見回すと、自軍の応援席から降り注ぐ大歓声と、痛烈で温かい祝福の罵声に包まれている自分に気がつき、玉川は恐縮のあまり再び地に足が着かなくなつてしまつただつた。

こんなやつが世の中にはいるとは

三田丸山の監督、北条時政はさすがに呆れてベンチで苦笑いし、首を振つていた。

天才だった。

それも天性のバットコントロールとパワーを具えたスラッガーだった。

好打者と呼ばれる選手は大きく二種類に分かれる。

一つには、素振りできっちりスイングの軌道を作り込んで、「形」で打つタイプ。

そしてもう一つは、スイングの形を持たず、投手の投げた球に臨機応変にバットの軌道を変化させて対応してしまう、「無形」のタイ

プだ。

玉川は典型的なこの後者のタイプだつたわけだが、彼にとつて不幸だつたのは、自分にはそんな器用さなどないと頭から思い込んでいたところだつたのだ。

彼の見た目の悪さも災いしていた。

今まで彼と接した人間の誰もが、彼の体型や動作の野暮ったさに騙され、彼の才能に気づこうともしなかつたのだ。

だが、だからと言ってそれらの人たちを責めることはできないだろう。

彼の父親からして、最初に左打ちを教え込んだ際に、彼の才能に気づくことなく、徹底して「形」から教えてしまつたのである。

そして玉川も、頑ななまでにそれを守りすぎた結果、いざ投手の投げたボールを打つにあたつて、その型にはまりすぎたスイングが仇となり続けてきたのだった。

ところが。

神は彼を見放してはいなかつた。

彼の極度なアガリ性の性格が、試合の時だけ彼のスイングの「形」を忘れさせるのである。

舞台が大きくなり、顔面が蒼白になり、頭の中が真っ白になつた時だけ、彼はその呪縛から解放されるのである。

追いつめられてはじめて天性の才能を垣間見せるバッター。

練習では、その一割も実力を發揮できず、大試合でしか能力の出せない、開き直れない性格。

天才というより異能打者と言つべきだろう。

もつとも監督の北条からしても、まだそこまで気づいているわけではない。

玉川のベンチ入りを決めたのは、確かに鳥羽に対する気遣いもないではなかつた。

また、玉川が一人残つて血のにじむような練習をしていたのも知っていた。

だが、それだけで誰が見ても実力のない者をベンチに入れたのでは、Bや父兄に説明がつかない。

野球部などという得体の知れない組織の力学に、彼は臆していたのである。

他の部員を発奮させるため、なんて言えば聞こえはいいが三日月山の貧打線に業を煮やしていたのは、鳥羽だけではなかつた。この北条とて、この「点の取れない打線」に忸怩たる思いでこの夏を迎えていたのである。

不動のレギュラーという座にあぐらをかいて、通り一遍の練習しかしようとしない他の部員たちに一泡吹かせてやりたい。自分たちが打てないことを他人事のように棚に上げて、まるで鳥羽一人が頑張っているのが悪いかのように、陰でぶつぶつ言つている連中に思い知らせてやりたい。

鳥羽に玉川の手を見せられて、その思いが一気に弾けた。

中学・高校・大学と野球部に席をおいたが、あれほど力チカチに硬くなつた手のひらは見たことがなかつた。

一体どれくらいバットを振つたら、あんな手になるのか。

いいぞ玉川、この試合は残りの打席も全部打たせてやる、お前がどこまでやるのか見せてみろ

結果、ばくちといつより自爆、玉砕と言つてもいい大抜擢が的中したのだつた。

「お前、なに泣いてんだよ、試合中に？」

大鉄は一点先行されたことも忘れて、つい呆れて笑つてしまつた。

「だつて、悔しいんだもん、あんたに甲子園行つてもらいたかつたのに……」

「まだ一点とられただけだよ、ヒットだつてまだ一本打たれただけだ」

「ホームラン打たれるのが、こんなに悔しいなんて」

「フォークはちゃんと落ちてたよ、あんなワンバウンド寸前のクソボールをあそこまで飛ばされちゃ、プロだつてお手上げだよ」

「信じられないわ、バットが軌道を変えて、ボールを追いかけてきたみたいだつた」

「まるでイチローだな、あんなやつがまだいたなんて」

大鉄はボールの吸い込まれたバックスクリーンをまじまじと振り返つた。

「とにかくこれでランナーがいなくなつたんだし、思い切りバッターに集中していこうぜ」

「これ以上打たれるもんですか。悔しい、キーッ！」

三日月山の応援はがぜん勢いづいて、足を踏み鳴らし、太鼓もブラスバンドも押せ押せの鳴り物をならしている。

だが麗華の立ち直りは見事だつた。

返つて不屈の闘志に火がついたかのように疲れも忘れ、その後の打者を三者三振に仕留めたのだつた。

イレギュラー

六回は両チームとともに二者凡退で、試合は七回表、沢谷香高校の攻撃を迎えていた。

この回先頭の二番花川口はファールで四球粘つたものの、最後はニアガラエアーズロックで三振にたおれた。

鳥羽はまだノーヒットピッチングを続けている。

ここまでくると球場は鳥羽の四試合連続ノーヒットノーランの期待にざわめきはじめているのだった。

だが沢谷香高校も決して鳥羽を気分よく投げさせていたわけではない。

序盤のバント作戦が封じられるとき度は全員がファールで粘り、で

きるだけ鳥羽に球数を投げさせる作戦に切り替えていたのである。

「チツ！」

八郎はしばらく粘った後、ショートを引っかけ、舌打ちをしながら一塁に走った。

「いや、面白いぞ……」

ベンチで牛若がつぶやいた。

当たり損ないだつたが、飛んだコースがショートの左の深いところだつたのだ。

「よしつ！」

ベンチの全員が異口同音に口の中で叫んだ。

ボールはショートのグローブからこぼれ出て転がっていた。

内野手がよくやる失敗である。

送球をあせるあまり、捕球するより先に投げる方向を見てしまい、ボールから田を離したのだ。

「記録は……？」

皆一斉にスコアボードを注視し、そして一斉にため息を吐いた。ランプはEに点いていた。

「まあ、よしとするか」

相変わらずノーヒットノーランという屈辱的な記録は続いているが、久しぶりのランナーにベンチは色めきたつた。

だが。

「ばかやうう、さつきもワンバウンド投げやがって、いいかげんにしろ」

一回表に続くショートの一回目のミスに鳥羽の額はひくひくと震えていた。

「辞めちまえ、てめえなんぞもついらねえ」

鳥羽は審判が見かねて「もう止めないか」と声をかけるまで、ショートを罵り続けるのだった。

ここへきて鳥羽は、はつきりと疲れを見せはじめていた。

沢高のファールによる消耗作戦と、自らのノーヒットノーランの記録のプレッシャーに加え、三田円山高校としては珍しく中盤に二点のリードを得たことで勝ちを意識する焦りが鳥羽に目に見えない重圧を与えてきたのである。

そしてこの鳥羽の乱心は、三田円山のチーム全体に張りつめていた緊張の糸を、思わず形で断ち切ることになるのだった。

四番の大鉄は、早くもバントの構えをしている。

次のエンリケが絶不調なのを考えるともつたいたいみたいだけど

だが、これは大鉄が自ら監督に志願したバントだった。

大鉄という男は、そういう人間だった。

バントも巧い。

内角高めのシユートを実に巧妙に、一墨線ぎりぎりにボールを転がす。

ところが。

一墨手の動きは不自然なくらい緩慢だった。

ファールになるのを待つてるのかな？

だがそうではなかった。

悠々とフェアグラウンドでボールを拾い上げ、鳥羽の顔をにらみつけている。

「ばかやろ？、なにやってやがんだ」

怒鳴りつける鳥羽に返事をする代わりに口の端をつり上げた歪んだ笑みで応え、あきらかに遅すぎる送球を一塁に放り投げたのである。それはまさしく「放り投げる」という表現が適切だった。彼はわざと大暴投を投げたのだった。

しかも一塁のカバーには誰も入っていない。

本来そこにいるべきセカンドは定位位置から動こうとせず、腰に手を当てて突っ立っていた。

およそ野球の試合としてはありえない、異様な光景だった。

ハ郎も大鉄も、呆気に取られながらもそのまま走り続け、代打からライトのポジションに入っていた玉川が、ボールに追いついた時にはすでにハ郎はホームインし、大鉄は一塁まで進塁してしまっているのだった。

「て、てめえら……」

鳥羽の目が真っ赤に血走って、額中の筋肉が怒りのあまり小刻みに震えている。

「よせ、鳥羽、やめる」

一塁手に向かつて歩き出そうとする鳥羽に、サーブを守っている主将の七篠が後ろからしがみついた。

「お前ら、なにやってんだよ」

七篠も驚きのあまり声を裏返して一塁手と一塁手を交互ににらんだ。観客も静まり返っている。

誰も声も出ないようだった。

両投手の好投と、玉川のホームランという好試合に熱狂していただけに、その光景はあまりにも寒々としていた。

「タイムお願ひします」

七篠は慌てて叫んだ。

ショート、セカンド、ファーストの三人が、監督の交代の指示も出

ていないのに、勝手にベンチに向かって駆け出してしまったのである。

監督の北条は慌てて三人の交代を告げた。

「なにやつてんだ、あいつら……」

たつた今ホームインしてきたハ郎が、息を弾ませながら狐につままれたような顔で、グラウンドを振り返った。

「船は帆で持つ帆は船で持つ。鳥羽の暴言は度を越えてたもんね、まさに自業自得の四面楚歌つてやつだね」

牛若も呆れて目を丸くしながらそう言った。

「いいのかよ？ こんなんで一点もらつちまって」

「クーデターだよ、向こうが自滅したんだから仕方ないわ、三年の野手にとっちゃ下級生の前で鳥羽に怒鳴られ続けてきた鬱憤がたまりにたまつてただろうからな。そういう意味じやうちだつて……」

牛若は声を一段低くして、

「ついこないだまで事情はたいして変わらなかつたけどな」とチラと麗華を見た。

「なあに？」

麗華も牛若を見ていて、田が合つてしまつた。

「いや、なんでもない、気にすんなよ」

牛若も特に悪気はなかつたので、すっかり動搖してしまつた。

「ま、まあ、後味は悪いけど、うちにとつては願つてもない棚ボタだよ、一点入つてまだランナー一塁だもんな」

「でも、次はエンリケだぜ、ここにはバントじやね？」

「まったくあいつ、今大会まだノーヒットだもんな、一体どうしちまつたんだ」

牛若はいら立たしげにエンリケの背中をにらんだ。

もともとエンリケは波の激しい打者なのだが、今大会のブレークは特にひどかつた。

だが彼の場合、一回落り出すと爆発的な固め打ちをするという期待感もあるため、引っ込めてしまつわけにもいかないのである。

「ランナーを二塁に送れば、遠藤なら内野ゴロくらい打てるだろ、向こうの内野はほぼ総入れ替えになつて浮き足立つてるし、転がしゃあなんとかなりそつ……え？」

「ストライクスリー」

八郎が言い終わらないうちに主審が三振を宣告していた。

「は、早すぎだろ、あのバカ」

「このチャンスで三球三振かよ、あのバカ」

「お前、少しば粘れよ、せつかく相手が自滅してくれてるのに首をかしげながら帰つてきたエンリケに、八郎が咬みつく。「いやー、あんまりボールがバットに当らないから、試しに目をつぶつて振つてみたら、やつぱり当らなくてさ」

エンリケはにやにやしながらそう言った。

相手チームが乱闘寸前にもめていようが、この男には関係ないらし
い。

「お前……」

三振したエンリケよりもしろ八郎と牛若の方が泣きそうな顔になつて口をそろえた。

「……狂つてるよ……」

「そりかな? ははは

「こ、このやうう、いつもヒラーはしやがるし、今日負けたらお前のせいだぞ、ドアホウ」

「いやいや、大丈夫、次は打てるから」

「なんだこのやうう、根拠のねえハツタリぬかしやがつて

「いい作戦を思いついたよ」

「けつ、だいたいこのままじゃ次はもつ、お前えまで回らねえよ

「まあ頑張つて回してちょうどだいな、次は保証するから」

「死火山が噴火するのを待つようなもんだぜ」

牛若の痛烈な嫌味にもエンリケは肩をすくめてにやにや笑うだけである。

「いやいや、ほんとはチアガールが気になつちゃつて打てないか

ら見えないように手をつぶつた。なんて言つたら怒るんだろうな」といつら敵に回すと彼ほど恐い男もないが、味方につけてもこれほど頼りにならないやつもない。

エンリケという男はそういう人間だった。

一方、遠藤はよく粘つたが、結局平凡なサーブゴロに終わるのだった。

だが、沢谷香高校はこの回ノーヒットで貴重な一点を手に入れたのである。

七回裏、三田月山高校の北条監督はベンチの前に円陣を組ませていた。

試合は一対一、点ijソリードしているとはいえ、勢いは沢高にある。しかもつい今しがた一点取られた三田月山の内野陣は、総崩れと言つていい。

だがそんな緊迫した局面にあって、北条は実におだやかな口調で選手たちに語りかけていた。

「……この大会が終わったら三年生のうち、何割が野球を続けていくか俺は知らん。だが、お前たちには野球の世界だけでなく、ごく普通の社会人として生きてゆくためにも、一つだけ大事なことを言つておく」

先ほど自ら退いた三人の内野手は円陣に加わるひつとしなかつたが、北条は強いて入れとも言わなかつた。

北条はただバックスクリーンのあたりをぼんやりとながめていた。

「全員玉川の手のひらをよく見る、お前らも言いたいことはあるだろうが、俺がお前に教えられなかつたことをこいつの手が教えてくれるだろ?」

北条は「それだけだ」と言つとベンチの奥に引っ込んでしまつた。そしてベンチの隅に座つてゐる三人にも「おい」と声をかけた。

「お前らも、試合終わつてからでいいから、よく見ておけ」

そういう残していくものの場所にどかりと腰をおろした。

北条が腰をおろしたのを合図のように、円陣の選手たちは次々に、

玉川の手を取った。

玉川が恥ずかしそうに出す手を見た者は、まるでその手に頬を張られたかのようにうなだれ、その打たれていらない張り手の痛みに堪えるように顔を歪めるのだった。

「残り三回だ、力を出し切れ」

全員が一通り見終わると、ベンチの奥から北条の力強い檄が飛んだ。

「オスツ」

彼らの返事は、今にも泣き出しそうに裏返っていた。

どうしたんだろ？、急にバッターの目の色が変わったわ

三日月山高校三番、主将七篠の目つきは前の打席とはあきらかに違つた。

構えも違つ。

バッターボックスのラインぎりぎりに立ち、ホームに被つている。あわよくばテッドボールでも出墾しようとした構えだ。

今までいじけた子供みたいだつたけど

三日月山高校の打者には、共通した特徴があった。

よく言えばスマートと言えなくもないが、悪く言えば淡白、とうより、もつと鼻につく屈折したヒリズムのような雰囲気を、鳥羽と玉川以外の三年生は漂わせていたのだ。

運動のできない小学生などが、一生懸命やつて出来ないのが格好悪いため、体育の授業などで最初から本気でやろうとしない、あのかわいげのない虚無感である。

だが、この打席の七篠はまるで別人のように泥臭かった。内角球を恐れず、逆に「当ってくれ」とばかりに体を寄せてくる。不恰好なほど短く持つたバットで、とにかくコツコツと当てにきていた。

いつたいなにがあつたか知らないけど、打たせはしないわ、

この回は鳥羽と玉川に回るんだから

しかし、麗華も疲れている。

決め球の、空振りを獲るはずのスライダーが甘く入った。
いや、それでもいつもなら空振りが獲れたかも知れない。
相手は三番で主将、腐つても鯛だ。

しかも目の色が違う。

執念で振り抜いた打球はショートの左に転がった。

オーケー任せろ

当たりは悪くないが牛若の守備範囲は広い。

だが。

「うわっ、痛てつ」

打球は七篠の執念が乗り移ったようにイレギュラーし、牛若の左肩に当った。

ショート強襲の内野安打である。

しかも七篠は一塁にヘッドスライディングをして、三日月山のベンチもにわかに湧きかえっている。

この回の三日月山はあきらかに違つた。

そして。

え？

おいおい……

沢高の守備陣全員が、我が目を疑つた。

鳥羽がバントの構えをしているのだ。

プライドがユニフォームを着てるようなこの男が、よほどもう一點が欲しいんだな

無理もないことだと大鉄は思つ。

三日月山は三人もの内野手が突然入れ代わったのだ。

少なくともその三人が、スタメンより優れているとは、とうてい思われなかつた。

投手戦で恐いのは、長打とエラーと四死球だ。

三日月山はその長打で優勢に立つてゐるもの、これから八、

九回、自軍のエラーの影におびえ続けなければならぬのである。

わせるもんですか

麗華は内角高めに思きり速球を投げたが、鳥羽はあっさりと一墨線にボールを転がしてしまった。

そして「あの男」がおどおどしながらバッター・ボックスに入ると、グラウンドには再び、拍手の雨が降つてくるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9470w/>

彼に代わってピッチャー元カノ

2011年11月17日21時09分発行